

高槻市文化財調査報告書 第2冊

紅葺山及岡本山東地区遺跡の調査

1966年3月

高槻市教育委員会

高槻市文化財調査報告書 第2冊

紅葺山及岡本山東地区遺跡の調査

1966年3月

高槻市教育委員会

序

先に発刊しました高槻市文化財調査報告書第1冊『塚脇古墳群』について、このたび『紅茸山及岡本山東地区遺跡の調査』をその第2冊として、めでたく刊行の運びにいたしましたことは、高槻市教育委員会といたしまして、まことに悦びにたえないところであります。

既に発掘調査しました塚脇古墳群から出土いたしました種々の鉄製品や石製品、あるいは、須恵器や土師器の数々は、私達の先輩達が和政権の支配の下にどんな生活様式をもっていたかを物語ってくれます。そして、4世紀頃から7世紀頃にかけて、この土地にこのような立派な古墳を作った首長たちが、千数百年以後の現代の社会機構やその中に生活する後裔たちの生活実態を想像していたとしたらどんなに素晴らしいことでしたでしょう。また、もしも彼らの中に民主的政治機構の実現を願っていた人がいたとしたら、民主主義社会の実現ももつと早く見られたであろう、などと考え合せると、私達現代に生を享けた者として、その生活態度や物の考え方などに関し深い反省を促されているかの如く感じられます。私たちは一刻も早く封建的文化遺産の非合理的なものから脱却し、民主的文化遺産を蘇らせ、合理的にして明るい未来に遺すに足る新鮮な文化の建設に、一段と努力すべき責務を痛感せずにはいられません。

さて、こんどの調査は、紅茸山と岡本山東地区で、1961年の春と秋に名神高速道路建設工事中に発見されました古墳・遺跡・火葬墓などを、高槻市教育委員会が主催して行ったものであります。この調査報告書は先の第1冊の場合と同じく、綿密で周到な計画を立てて見事に完成されたものであります。ここに担当者の天野高信氏らのご労苦に対し深甚の敬意を払う次第であります。

終りに遺物の整理について、とくにご援助を与えられました大阪府教育委員会はじめ発掘調査にご協力下さいました関係各位に対し深く感謝の意を表しまして、第2冊目刊行の序文とさせていただきます。

1966年3月

高槻市教育委員会教育長

入 谷 唯 一 郎

序 文

名神高速道路建設工事に際して、高槻市内において数多くの古代遺跡を発掘しております。例えば土保山古墳だとか二子山古墳だとか岡本山古墳だとかがあって、これらは古代の三島地方を解明する上に大切な種々の資料を提供しました。今ここに西谷正氏によって著作されましたこの報告もそれらの貴重な資料の一部であります。この著は紅茸山地区と岡本山東地区の発掘調査報告からなっています。紅茸山地区の発掘調査は、昭和36年の春に、高槻市の主催でなされたものでありまして、現地であって主としてこれに当られたのが西谷氏であります。この調査は古墳と祭祀遺跡を含んでいるものであります。いずれも5世紀後半のものでありまして、古墳は付近の東に近い磐手杜古墳と共にこの地区の古墳群の一として重要なものであります。祭祀遺跡の方はこの地区が磐手とも呼ばれている点からも大切なものでないかと考えるのであります。

また、岡本山東地区は、昭和36年の秋、高槻市の主催で発掘調査がなされましたもので、8世紀と10世紀の火葬墓として重要な資料を見ましたし、更に7世紀前半の積石壺棺墓を発掘していることであります。これらは単に高槻の古代を知る上の重要な資料であるのみならず、日本の古墳あるいは葬制を闡明する上の重大な史料にもなることでしょう。これらについての詳しいことは本書によってご覧願いたいと存じます。

現地であってこの発掘調査に従事された著者西谷氏は京都大学考古学研究室で考古学を専攻されている方でありまして、三島地区の古墳発掘は勿論のこと日本全国の古墳発掘にも関係しておられます。この著及び西谷氏の研究が日本古代の墓制の研究に至大な貢献であります様念願してやまないものであります。

なお、この発掘関係者の一人として私はこの度の発掘調査に何かとご指導を賜わり、またその整理に当っては莫大な援助を与えられました大阪府教育委員会に深甚な謝意を表すものであります。

最後にこの書を『高槻市文化財調査報告書』の第2冊として発刊するに当たり、かかる文化財の基本的研究に常に温いご指導とご支援を賜った高槻市当局、並びに高槻市教育委員会にも厚くお礼を申す次第であります。

昭和41年春のお彼岸の日

成蹊女子短期大学教授

天 野 高 信

目 次

紅茸山及岡本山東地区遺跡の調査

西 谷 正

第 1 章 紅茸山古墳の調査	1
第 1 節 古 墳 の 位 置	1
第 2 節 調 査 の 経 過	2
第 3 節 古 墳 の 構 造	3
第 4 節 埋葬施設と遺物の出土状況	6
第 5 節 遺 物	10
第 6 節 結 語	18
第 2 章 紅茸山祭祀遺跡の調査	20
第 3 章 岡本山東地区火葬墓の調査	24
第 1 節 火 葬 墓 ①	25
第 2 節 火 葬 墓 ②	28
第 3 節 火 葬 墓 ③	29
第 4 章 岡本山東地区積石壺棺墓の調査	30

図 版 目 次

本文対照頁

図版第 1	(1) 紅葺山古墳航空写真……………	1
	(2) 紅葺山古墳の西方からの近景 (西谷正撮影) ……	1
図版第 2	(1) 紅葺山古墳の西南方からの全景 (西谷撮影) ……	1・3
	(2) 紅葺山古墳の内部主体発掘状況 (西谷撮影) ……	6~10
図版第 3	(1) 紅葺山古墳の円筒埴輪列 (西谷撮影) ……	5
	(2) 紅葺山古墳の第 2 埋葬施設 (西谷撮影) ……	9・10
図版第 4	(1) 紅葺山古墳遺物勾玉・管玉 (真陽社撮影) ……	10・11
	(2) 紅葺山古墳遺物鉄鏃・鉄刀子 (真陽社撮影) ……	11・12
図版第 5	(1) 紅葺山古墳遺物鉄製品 (真陽社撮影) ……	12・13
	(2) 奥阪古墳遺物鏡 (藪重孝撮影) ……	1
図版第 6	(1) 紅葺山古墳遺物形象埴輪 (盾) (真陽社撮影) ……	14
	(2) 紅葺山古墳遺物形象埴輪 (靱) (真陽社撮影) ……	14・15
図版第 7	紅葺山古墳遺物形象埴輪 (家その他) (真陽社撮影) ……	15
図版第 8	(1) 紅葺山遺跡東南方からの遠景 (西谷撮影) ……	20
	(2) 紅葺山遺跡遺物出土状況 (西谷撮影) ……	21
図版第 9	紅葺山遺跡遺物須恵器・滑石製紡錘車 (真陽社撮影) ……	22
図版第 10	(1) 岡本山東地区西北方からの遠景 (西谷撮影) ……	24
	(2) 岡本山東地区積石壺棺墓 (西谷撮影) ……	30
図版第 11	(1) 岡本山東地区火葬墓②遺物須恵器 (真陽社撮影) ……	28
	(2) 岡本山東地区火葬墓①遺物須恵器 (真陽社撮影) ……	25~27

挿 図 目 次

第 1 図	紅葺山の位置 (二万五千分ノ一「高槻」図幅分載) ……	1
第 2 図	紅葺山古墳付近地形図 (日本道路公団製作地図による) ……	4
第 3 図	紅葺山古墳葺石実測図 (水野正好・八木・四手井晴子・伊藤・村上絃揚実測, 西谷製図) ……	5
第 4 図	紅葺山古墳外形実測図 (西谷・田代克己・八木久栄・伊藤久嗣実測, 西谷製図) ……	6
第 5 図	紅葺山古墳円筒埴輪出土状況図 (水野・八木・四手井・三木倭子・村上実測, 西谷製図) ……	7

第 6 図	紅葦山古墳葺石 (西谷撮影)	7
第 7 図	紅葦山古墳内部主体実測図 (水野・田代・西谷・八木・伊藤実測, 西谷製図)	8
第 8 図	紅葦山古墳断面実測図 (水野・西谷・田代・八木・四手井実測, 西谷製図)	8—9
第 9 図	紅葦山古墳南棺墓壇 (西谷撮影)	9
第 10 図	紅葦山古墳玉類・櫛出土状況図 (水野実測, 西谷製図)	9
第 11 図	紅葦山古墳北棺西群鉄鏃出土状況図 (西谷実測製図)	9
第 12 図	紅葦山古墳北棺西群鉄鏃出土状況 (西谷撮影)	9
第 13 図	紅葦山古墳玉類・櫛出土状況 (西谷撮影)	10
第 14 図	紅葦山古墳南棺遺物出土状況 (西谷撮影)	10
第 15 図	紅葦山古墳北棺東群鉄鏃出土状況図 (西谷実測製図)	11
第 16 図	紅葦山古墳南棺遺物出土状況 (西谷撮影)	12
第 17 図	紅葦山古墳玉類・櫛実測図 (西谷実測製図)	12
第 18 図	紅葦山古墳鉄鏃・鉄刀子実測図 (西谷実測製図)	13
第 19 図	紅葦山古墳鉄刀実測図 (西谷実測製図)	13
第 20 図	紅葦山古墳鉄器実測図 (西谷実測製図)	14
第 21 図	紅葦山古墳円筒埴輪実測図 (西谷実測製図)	14
第 22 図	紅葦山古墳盾形埴輪拓影 (西谷作製)	15
第 23 図	紅葦山古墳靱形埴輪拓影 (西谷作製)	16
第 24 図	紅葦山古墳基底部出土弥生式土器実測図 (西谷実測製図)	17
第 25 図	紅葦山古墳基底部出土石鏃実測図 (西谷実測製図)	18
第 26 図	紅葦山古墳円筒埴輪 (西谷撮影)	19
第 27 図	紅葦山遺跡地形図 (日本道路公団製作地図による)	20
第 28 図	紅葦山遺跡遺物出土状況図 (水野・西谷実測, 西谷製図)	21
第 29 図	紅葦山遺跡遺物出土状況 (西谷撮影)	21
第 30 図	紅葦山遺跡出土遺物実測図 (西谷実測製図)	23
第 31 図	岡本山東地区の位置 (二万五千分ノ一「高槻」図幅分載)	24
第 32 図	岡本山東地区地形図 (日本道路公団製作地図による)	25
第 33 図	岡本山東地区火葬墓①実測図 (西谷実測製図)	26
第 34 図	岡本山東地区火葬墓③実測図 (西谷実測製図)	26
第 35 図	岡本山東地区火葬墓① (西谷撮影)	27
第 36 図	岡本山東地区火葬墓①出土須恵器実測図 (西谷実測製図)	27
第 37 図	岡本山東地区火葬墓②出土須恵器実測図 (西谷実測製図)	27
第 38 図	岡本山東地区火葬墓③出土須恵器・土師器実測図 (西谷実測製図)	27

第 39 図	岡本山東地区火葬墓①出土須恵器（西谷撮影）	28
第 40 図	岡本山東地区火葬墓②出土須恵器（西谷撮影）	28
第 41 図	岡本山東地区火葬墓③（西谷撮影）	29
第 42 図	岡本山東地区火葬墓③出土須恵器・土師器（西谷撮影）	29
第 43 図	岡本山東地区積石壺棺墓実測図（伊藤・葛原克人・村上実測，西谷製図）	30
第 44 図	岡本山東地区積石壺棺墓須恵器実測図（西谷実測製図）	31
第 45 図	岡本山東地区積石壺棺墓副葬須恵器出土状況（西谷撮影）	31
第 46 図	岡本山東地区積石壺棺墓副葬須恵器（西谷撮影）	31
第 47 図	岡本山東地区積石壺棺墓副葬遺物実測図（西谷実測製図）	32
第 48 図	岡本山東地区発見須恵器実測図（西谷実測製図）	32
第 49 図	岡本山東地区の現状（西谷撮影）	33

例 言

1. 高槻市教育委員会は、高槻市大字安満に所在した紅茸山古墳および紅茸山祭祀遺跡，そして、高槻市大字岡本に所在した岡本山東火葬墓および岡本山東積石壺棺墓などが，1961年に，名神高速道路建設工事を契機として発見されたので，それに対して事前調査を行なった。本書はその調査報告である。
2. 紅茸山地区および岡本山東地区の古墳や遺跡の調査は，高槻市教育委員会が成蹊女子短期大学教授天野高信氏を調査担当者に依頼し，奈良学芸大学・同志社大学・立命館大学の学生諸氏の協力を得て行なったものである。
3. 出土品の整理と本書の執筆は，京都大学考古学研究室の西谷正氏が担当された。整理に際して，高槻市教育研究所長宝来正三郎氏ほか職員の諸氏は便宜を与えられた。
4. 紅茸山地区調査の際の磐手小学校および岡本山東地区調査の際の宮本常太郎氏らの世話や，本書出版の過程における京都大学の小林行雄博士の指導など，諸種の協力を与えられた関係各位の厚意に対して，深く感謝する次第である。

1966年3月

高槻市教育委員会社会教育課長

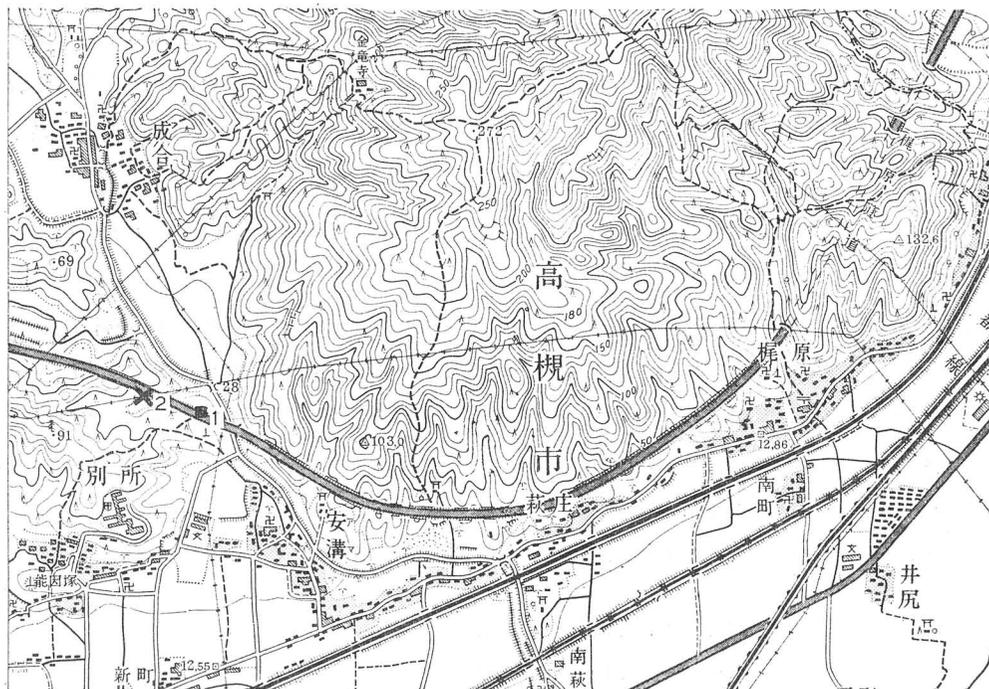
下 浦 倉 次

第1章 紅茸山古墳の調査

第1節 古墳の位置〔図版第1・2〕

紅茸山古墳は高槻市大字安満 691 の15番地にあり、通称^{べにたけやま}紅茸山の一隅に位置する。安満の集落から成合地区に入る道路が檜尾川と交叉する、磐手橋の西南約150mのところである。高槻市の北方を限る老坂山脈から南に向ってのびた洪積丘陵の一支脈から、さらに東方へ突出する一つの尾根の突端近くに营造され、墳頂部の標高は37.4mを測る（第1・2図）。

この古墳の西方にある同じ丘陵上には、弥生時代後期の古首部遺跡^①があり、古墳時代になると、5世紀の奥阪古墳^②（図版第5(2)）や横穴式石室を有する羅王山古墳^③がある。また、この紅茸山古墳の対岸、檜尾川を隔てたところに鎮座する磐手杜神社の裏山には、横穴式石室が数



第1図 紅茸山の位置（縮尺1/25000） 1. 紅茸山古墳 2. 紅茸山遺跡

④ 基分布する。さらに、北方の成合地区からも弥生時代の^⑤石斧の出土が報ぜられ、また、7世紀以降の須恵器窯跡^⑥も発見されている。紅茸山古墳は、このような豊かな考古学的環境の中にあるわけである。

注 ① 免山篤「古首部の弥生式遺跡の遺物」(『古代学研究』第26号, 1960)。

② かなり古い時代に発見されたらしく、出土した内行花文鏡1, 変形神獸鏡2, 四獸鏡1, 碧玉製勾玉1, 砥石2は、現在、東京国立博物館の所蔵となっている(図版第5(2))。

③ 横穴式石室の石材の一部が露出している。

④ 神社裏の古墳からは碧玉製管玉や須恵器が出土している。山頂部にある数基は開口しているものもあるが、出土品は不明である。

⑤ 1956年春に成合の春日神社裏山で発見された。

⑥ 7世紀後半以降の須恵器窯跡1基を確認しているが、付近にもまだ窯跡はあるらしい。

第2節 調査の経過

紅茸山古墳が発見されるにいたったのは、1961年春、名神高速道路工事の開始とともに、まず、路線上の樹木の伐採が行なわれたことによる。1961年3月11日、古首部・安満地区を踏査中の西谷より、この通報を受けた高槻市教育委員会では、ただちに、遺跡発見届を出すとともに、大阪府教育委員会と種々協議を行なった。その結果、3月23日にいって、高槻市教育委員会主催のもとに、緊急調査を行なうことに決定し、3月29日に、府教委へ書類を提出した。

こうして、3月31日から7月16日にわたる間に、計26日を費し、延 131 人の労力を投入して発掘を行なった。

調査は、成蹊女子短期大学教授天野高信を担当者として、奈良学芸大学学生西谷正、同志社大学大学院学生水野正好、同志社大学学生田代克己・四手井晴子・八木久栄・三木倭子・伊藤久嗣、立命館大学学生村上紘揚らが、立命館大学大学院学生喜谷美宣、同志社大学学生石附喜三男らの協力^註を得て行なった。

経費は全額高槻市々費をもって行ない、25,350円を費した。

以下、日誌によって経過をたどろう。

3月31日 外形測量。方墳であることを確認。

4月1日 外形写真撮影。発掘開始。表土の除去に着手。

4月2日 遠景写真撮影。表土の除去を終わり、墳丘の中央部を掘り下げる。

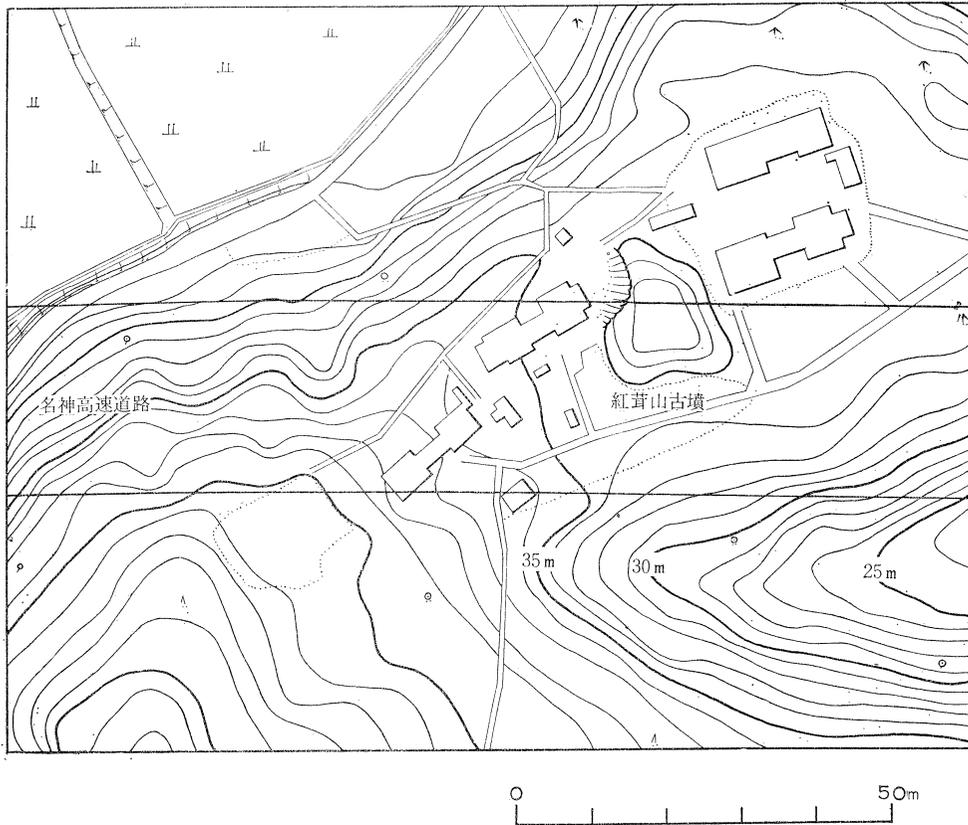
- 4月3日 内部主体の一部にあたる粘土塊を掘りあて、鉄器を発見。これが以下に南棺とよぶものにあたる。
- 4月4・5日 南棺清掃。北半部を2mほど掘り下げる。封土中に弥生式土器の包含を認める。
- 4月6日 北半部において、現地表下約2.5mまで掘り下げ、地山に達する。弥生時代の住居址の壁面や柱穴と思われるものを認める。
- 4月7・8日 南棺を残して、墳丘の周囲で地山面を出す。同時に、封土下の弥生時代住居址を追求。
- 4月9日 墳丘築成状況を知る目的で、東西南北にトレンチを設定。
- 4月10日 北トレンチ付近で葺石を検出。南棺清掃。
- 4月11日 南棺清掃。北トレンチ内にて墳丘斜面の裾においた円筒埴輪を発見。
- 4月12日 雨。作業中止。
- 4月13日 北トレンチを拡張し葺石・円筒埴輪を追求。墳丘中央部において北棺を検出。北棺は南棺に平行しているが、やや上位にある。
- 4月14日 円筒埴輪列の清掃と撮影。測量用ポイント設定。
- 4月15日 雨。作業中止。
- 4月16日 北棺の全貌を確認。葺石実測。
- 4月17日 南北両棺の清掃と撮影。
- 4月18日 南北両棺の清掃・実測を終わり、遺物をとりあげる。
- 4月19日 作業休止。
- 4月20・21日 南北両棺墓壙の検出。
- 4月22日 作業休止。
- 4月23～25日 残部のトレンチの発掘、断面の清掃と層位の認定。
- 4月26日 墳丘断面の一部実測。午後、雨天のため遺物の運搬と洗滌。
- 4月27日 遺物整理。
- 5月3日 墳丘断面実測。午後、雨。
- 7月16日 墳丘断面実測。調査終了。

その後は、高槻市教育研究所に遺物を保管し、主として西谷がその整理を行なった。

注 いづれも調査当時の資格である。

第3節 古墳の構造〔図版第2・3〕

紅葺山古墳は、その各辺が東西南北の軸線とほぼ合致する方錐台状の方墳である。調査前の高さ2.8m、下縁での東西の長さ約17.5m、南北の長さ約19.5m、上縁での東西の長さ10.4m、南北の長さ約9.6mの規模を有したが、方墳の北西隅、北東隅および西縁など封土



第2図 紅茸山古墳付近地形図(縮尺1/1000)

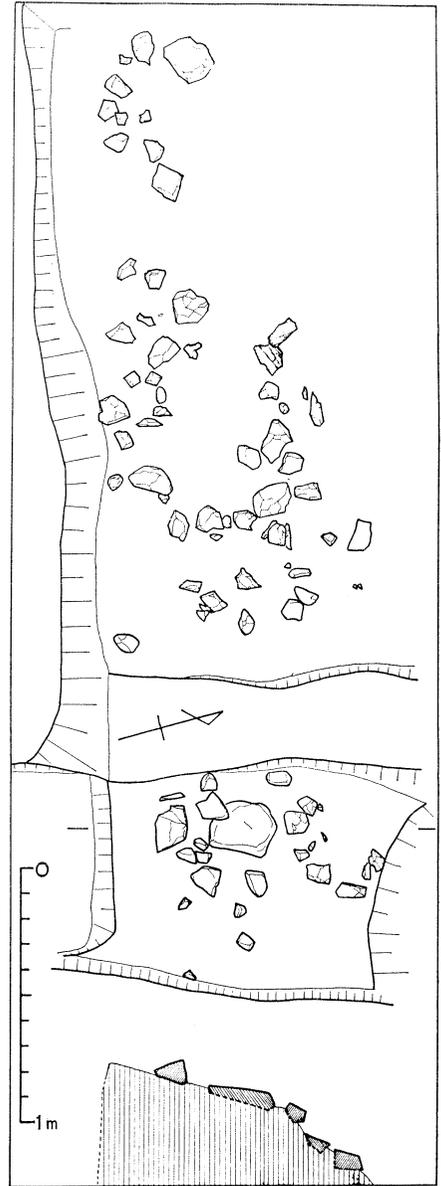
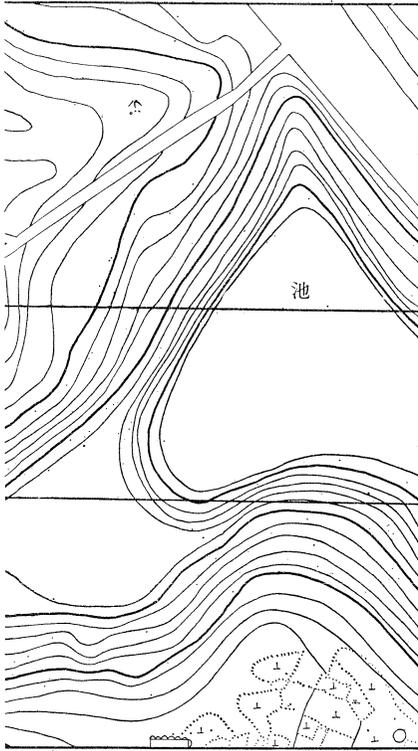
の一部が開拓によって削平されているので、旧状を完全には残していない(第4図)。

この数値を調査の結果によって修正すると、墳丘断面に現われた基底部の状況より推定して、東西の長さ約16m以上、南北の長さ約17m以上を測る。つまり外表での規模は一辺の長さ18~20m位と復元することができる。

この古墳の位置する丘陵上には弥生時代後期の竪穴式住居遺跡があり、古墳はその上に築かれている。

この古墳の築造法は、東西の長さ約16m、南北の長さ約17mの方錐台を残して、周囲の地山を深さ1mほど掘り下げ、この基底部の上に盛土を行なったものである。地山の直上をおおう厚さ約50cmの盛土は黒色、黒褐色および暗黒色の3層に分れるが、いずれも上述の弥生式遺跡を削平して盛土に利用したために、層中に弥生式土器を豊富に包含している。さらに盛土はその上部に高く築成され、厚さ2.6mのうちに11層を検出しえた(第8図)。

外部施設としては、墳頂部に各種の埴輪が樹立されていたらしく、表土下から円筒埴輪



(朝顔形もある)や、家形・盾形および靱形などの形象埴輪の破片が出土した。また、墳丘の北端、斜面の下縁において、一直線にならぶ5個の円筒埴輪列を検出した(第5図)。各埴輪間の中心距離は75cm前後であった。墳丘西縁にあたる西斜面のトレンチ内からも円筒埴輪の存在を認めたので、当初、墳丘の下縁部を円筒埴輪列がめぐっていたことはほぼ明らかであろう。

葺石は北斜面上端部において約1.2mの幅で遺存していた。もと上下の円筒埴輪列の間に、帯状(鉢巻状)に葺石がめぐっていたことも推定される。葺石はまばらに置かれていて、すでに墳丘を保護(土留め)する機能は果されていず、形式的ないし装飾的となってきた(第3・6図)。

第3図 紅茸山古墳葺石実測図(縮尺1/2)

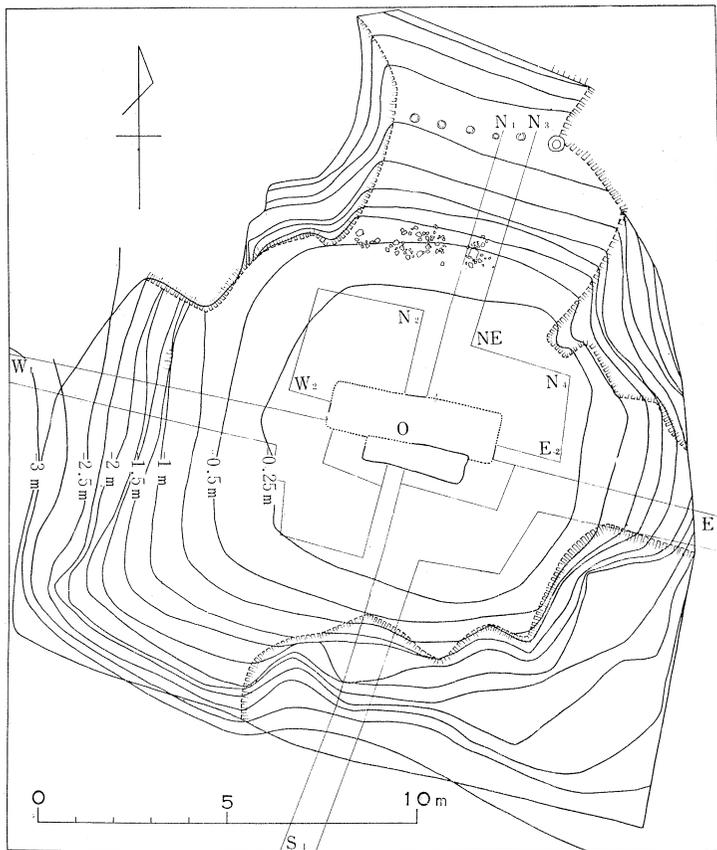
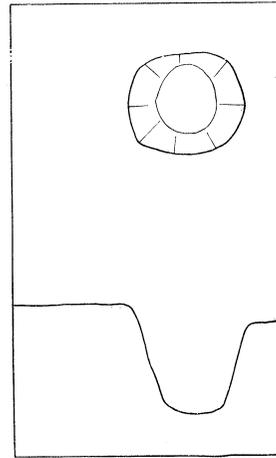
葺石はまばらに置かれていて、すでに墳丘を保護(土留め)する機能は果されていず、形式的ないし装飾的となってきた(第3・6図)。

第4節 埋葬施設と遺物の出土状況

〔図版第2・3〕

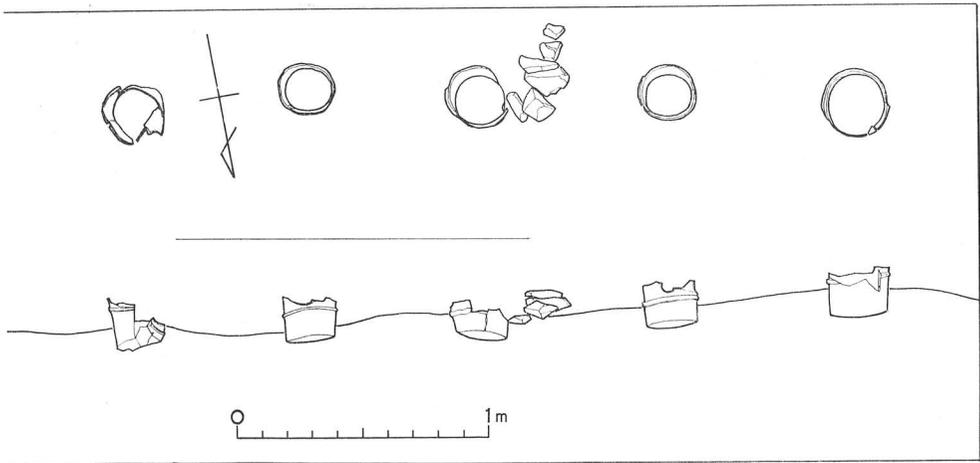
内部主体は、墳頂のほぼ中央部に東西に長く2個の墓壙を掘り、それぞれに木棺を直葬したらしい簡単なもので、2棺が南北に並葬されていた。北側にあつて主体的な位置のものを第1埋葬施設（北棺）、南側にあつて付随的なものを第2埋葬施設（南棺）と呼びたい（第7図）。

第1埋葬施設（北棺） 北棺は墳丘のほぼ中心部にあつて東西にむかう。墓壙は長さ約4.65 m、幅1.3~1.4 m、現墳頂からの



第4図 紅茸山古墳外形実測図（縮尺1/200）

深さ約0.55 mの長方形を呈し、その内部に長さ約4.2 m、幅約0.45 m、高さ0.25 m以上の木棺をほぼ水平に安置したと思われる。木棺は箱形であったことは明白である。墓壙の西壁南側で、棺身材の突起の陰痕と推定される凹部を認めている。木棺の長辺両側で、墓壙壁との空隙には、幅約0.35 m、厚さ約0.2 mの粘土を含む硬質の茶褐色土をつめている。棺内西半部では、墓壙

第5図 紅茸山古墳円筒埴輪出土状況図(縮尺 $\frac{1}{2}$)

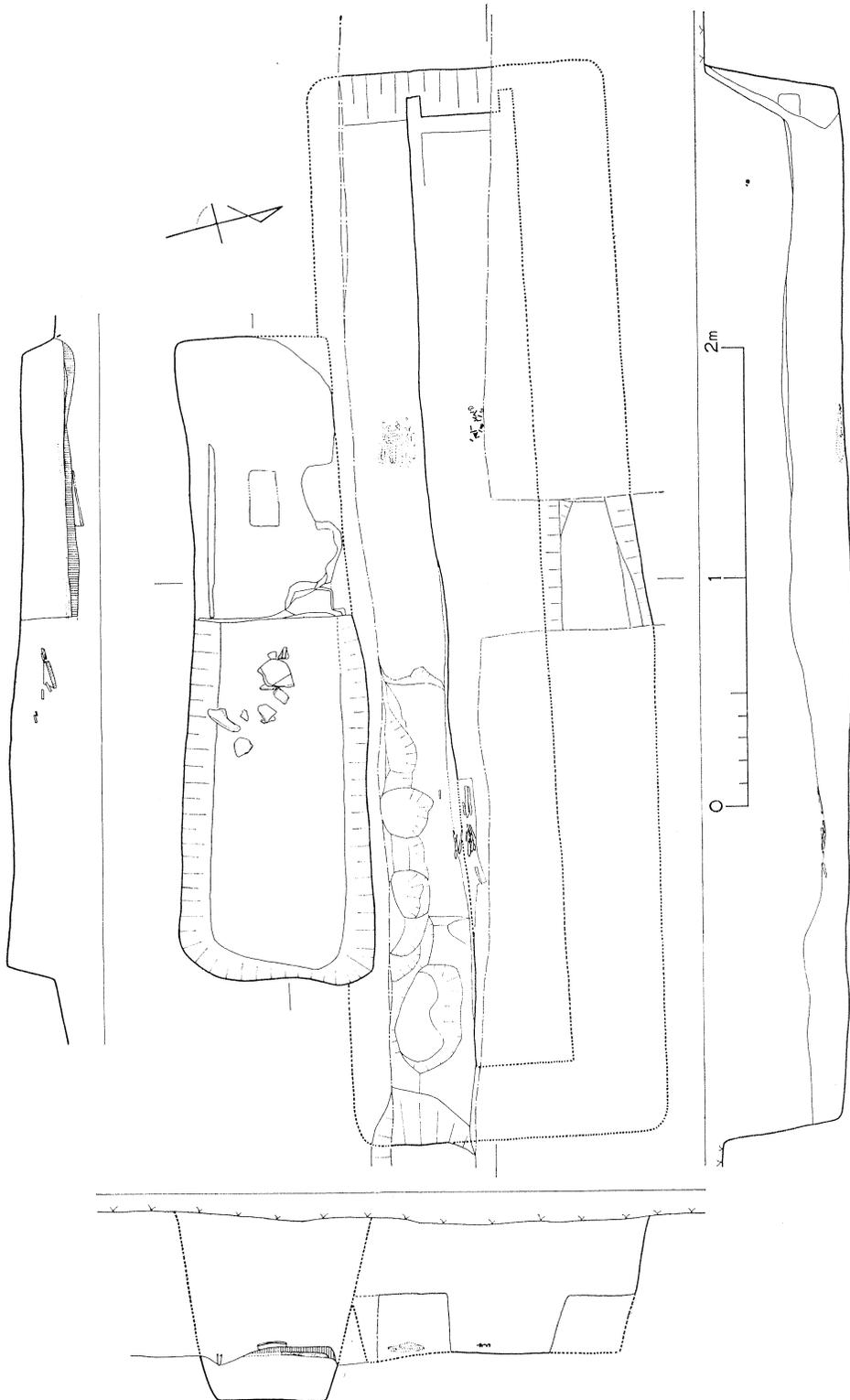
底面において、赤色顔料の散布を認めた。底面より10数cm上のところでも、一部に赤色顔料を含む面が認められたが、これは棺蓋が落下したときの位置と関連するものと考えられる。

次に遺物の出土状況をみよう。副葬品は棺内と棺外に分けておかれていた。まず、棺内では、中央から西よりの位置で石製勾玉2個、石製管玉15個からなる頸飾りが検出され、また、それに接して、漆櫛3個が発見された(第10・13図)。この出土状況から、この付近が頭部にあたることが推定され、したがって、西枕に葬られていたことが考えられる。棺外では玉類の南側、木棺の側面をつつむ粘

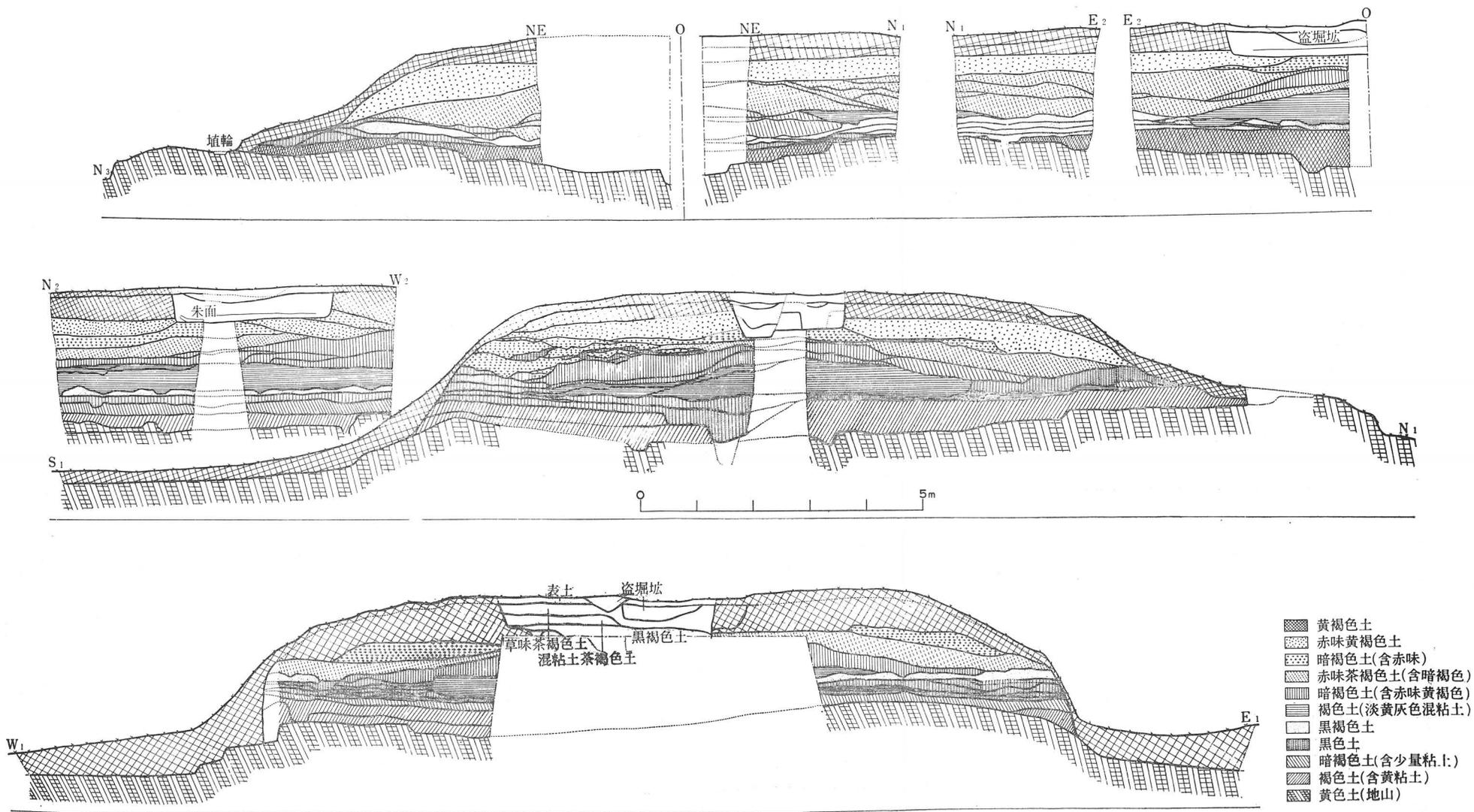


第6図 紅茸山古墳茸石

土まじりの茶褐色土の下にあたる竈底と同じ高さのところから、鉄鏃が10数本、切先を東に向けて検出された(第11・12図)。また、同じ棺外の南側で、足部に近い東部から、茶褐色土の上に切先を同じく東に向けて、合計9本の鉄鏃が、3本づつ3群にわかれて出土した(第15図)。さらにそのすぐ東からは鹿角把の鉄刀子1個を発見した。

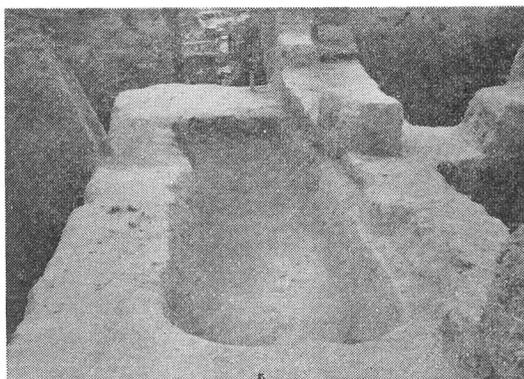


第7図 紅茸山古墳内部主体実測図(縮尺1/30)

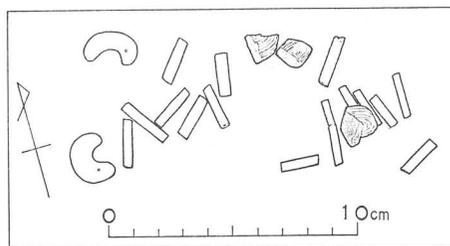


第8圖 紅葺山古墳断面実測図(縮尺1/100)

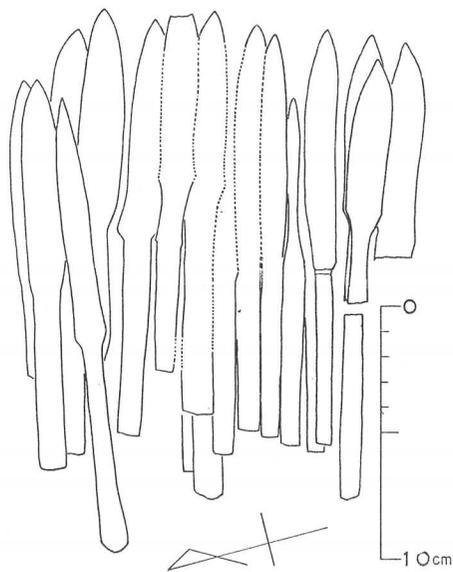
第2埋葬施設（南棺） 南棺は墳丘の中心部をはずれ、北棺に南接して位置する。墓壙は北棺の墓壙の一部を削って、東西に長さ約2.8m、幅約0.7m、深さ現墳頂下約0.8mの大きさに掘っている。壙底より0.2mのところ、赤色顔料や鉄刀などが認められたので、墓壙内を底部からいったん高さ0.2mのところまで土をつめ、その上に木棺を安置したと一応推定しておきたい。ただし、墓壙内に直接木棺を安置して、棺蓋に副葬品をおいたとも考えられる。二つの埋葬法のいずれかを決定する証拠にとぼしい。墓壙内東半は盗



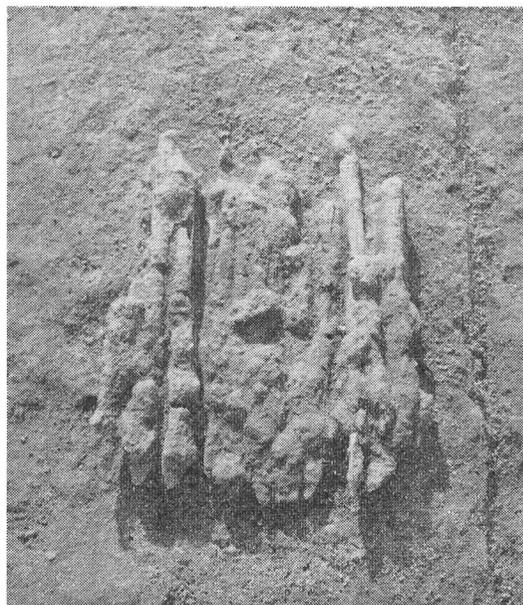
第9図 紅茸山古墳南棺墓壙



第10図 紅茸山古墳玉類・櫛出土状況図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）



第11図 紅茸山古墳北棺西群鉄鏃出土状況図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）



第12図 紅茸山古墳北棺西群鉄鏃出土状況



第13図
紅茸山古墳玉類・櫛
出土状況

掘のため攪乱されていてはつきりしないが、西半部では墓壙底から0.2 mのところ、赤色顔料のある面の上に、厚さ3~5 cmの粘土が認められた。おそらく当初この粘土は棺蓋を覆っていたものと考えられる(第14図)。

遺物は棺外のみから検出した。すなわち、墓壙と木棺南側との中間の西寄りに、鉄刀1口が切先を西に向けて副葬されていた。また、上述の粘土の上では長さ23.5 cm、幅13 cmの板状鉄製品や用途不明鉄製品が検出された(第16図)。そのほか、南棺のある位置に掘られた盗掘壙の中より、鉄鏃破片1個が発見されているが、これも南棺の副葬品の一つとできよう。同じく墓壙の一部に掘られた盗掘壙中より、形象埴輪破片数点が認められたが、これらはもちろん、墳頂に樹立していた埴輪が盗掘の時に入りこんだものである。

第5節 遺物〔図版第4~7〕

出土した遺物を列記すると次の通りである。



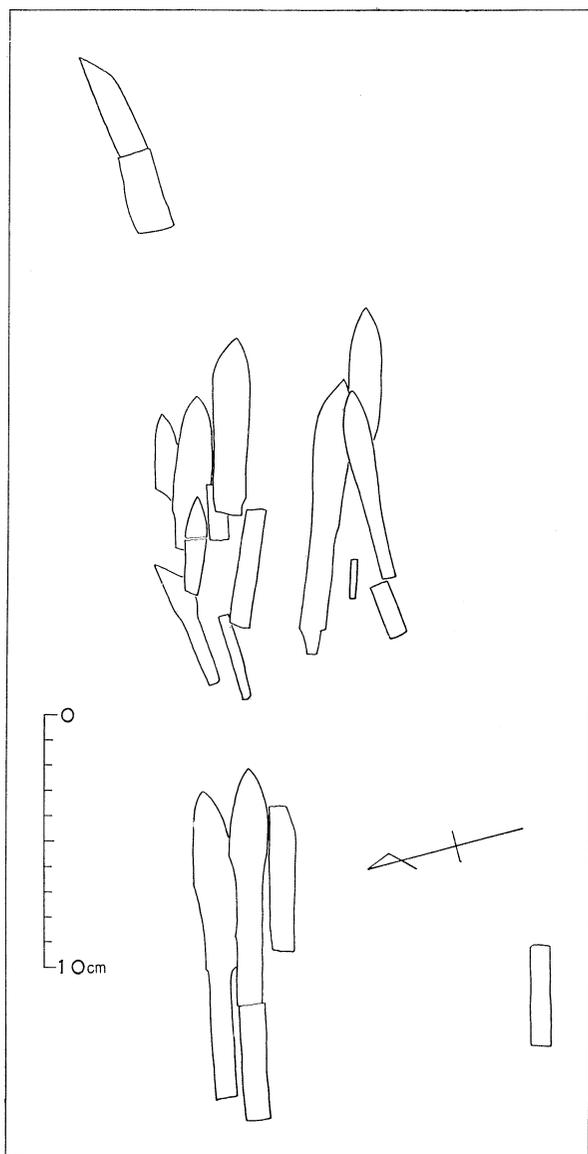
第14図 紅茸山古墳南棺遺物出土状況

- | | | |
|---------------------|-----------|--------------|
| (1) 北棺出土 | 石製勾玉 2 | 石製管玉 15 |
| | 漆櫛 3 | 鉄鏃 29 |
| | | 鹿角把鉄刀子 1 |
| (2) 南棺出土 | 鉄刀 1 | 板状鉄製品 1 |
| | 鉄鏃破片 1 | 用途不明鉄製品破片 若干 |
| (3) 墳頂部、墳丘斜面および表面採集 | | |
| | 円筒埴輪破片 若干 | 形象埴輪破片 若干 |
| | 須恵器破片 若干 | |
| (4) 墳丘下底部出土 | 弥生式土器 | 石鏃 1 |
- 1) 北棺出土
- 石製勾玉(第17図) 2個。灰緑色を呈した石製品であって、軟玉であるかも知れない。ずんぐりした形の頭部には両面から穿孔を行なっている。長さ1.95 cm、幅0.62 cmのものと、長さ2.05 cm、幅0.75

cmのものである。

石製管玉（第17図） 15個。灰青色ないし灰黒色を呈し、すべて両端から穿孔している。材質は滑石である可能性が強い。長さ2.7~1.25cm、直径0.4cm。

漆 櫛（第17図） 3個。材質はおそらく竹で、黒漆が塗られている。幅約1.6cmの頭部

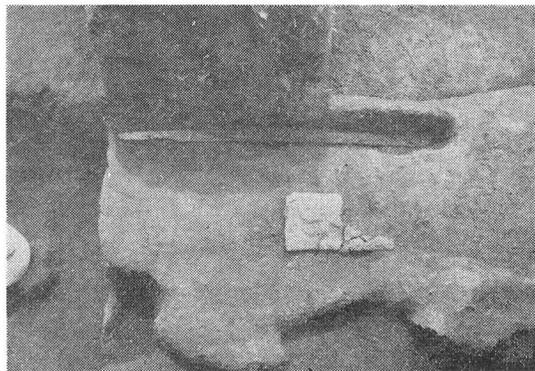


第15図 紅茸山古墳東群鉄鏃出土状況（縮尺 $\frac{1}{4}$ ）

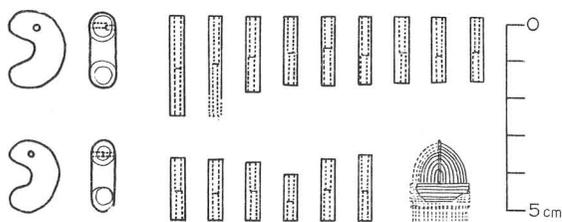
の破片が3点ある。古墳でよく発見される縦形であるが、長さはわからない。

鉄 鏃（第18図） 29本。東群の9本と西群の20本とは形態が異なっている。東群の鉄鏃は有茎の柳葉形に近いものである。長さは約11.5cmのもの（1）6本と、約11cmのもの（2）2本の2種があって、厚さは0.3cmを測る。着柄には、茎をしの竹様のものに差し、桜皮で巻いている。大阪府和泉黄金塚古墳東柳^①および京都府久津川古墳出土の鉄鏃に類似し、奈良県室大墓古墳の靱形埴輪に見える鏃^③に酷似している。

西群の鉄鏃は有茎式に属するが、形態によって2種に分けられる。すなわち、断面長方形の頸部に、三角形の頭部をもつ長頸鏃（5）と、菱形に近い形状の頭部をもつ柳葉形鏃（4・6・7）とに大別される。さらに、後者は長さによって3種に分けられる。5は2本、4は2本、6と7とはそれぞれ8本である。



第16図 紅茸山古墳南棺遺物出土状況

第17図 紅茸山古墳玉類・櫛実測図(縮尺 $\frac{1}{2}$)

用途不明鉄製品(第20図2~7) 棺蓋から出土した板状鉄製品1個と各種の形状の鉄製品破片11個について一括して説明する。鉄製品の様相や付着する漆膜などの類似から、共通の用途が考えられる。7は長さ23.5cm,幅13cm,厚さ約0.15cmの長方形の板状鉄製品である。長辺はわずかに内彎するに対し、短辺では一方が外湾し、他方が直線になっている。縦断面は直線状を呈して厚さの変化がない。横断面では表面に向かって湾曲して、中央で0.8cmほどの高まりをしめし、かつ両端が薄くなっている。裏面には釘が突出しているが、表面において隆起した頭部は認められない。現在、4個所にある釘は長辺からの距離がほぼ等しく2列になっていたかもしれない。上方に偏して配置された1個の釘状のものは弧状をなす。表面に出ていた痕跡はない。裏面には漆膜が付着している。盾の装着金具である可能性がある。

3は厚さ0.1cmの薄い鉄板を高さ1.7cm,幅0.9cmのU字形に折りまげたものの破片である。残存部の一端に近いところに、側面からうった釘の1個が認められる。木製盾の隅角に装着し、釘でとめたものであろうか、他に同様の破片が1個ある。

4は薄い鉄板の破片であるが、一部に弧状の縁を残す。残部の幅3.5cm,厚さ0.1cmである。打ちつけられた折釘状のものは、L字形をなし、断面方形を呈す。裏面には漆膜があって、

鹿角把鉄刀子(第18図3) 1口。
真直な背、やや内反りの感のある刃部をもつ刀身に、刃側に直角の関を作り茎につづいている。長さ約8.3cm。鹿角を用いて把としているが、把頭は欠失している。

2) 南棺出土

鉄刀(第19図) 1口,残長74cm
茎部長さ14cm。刃幅2.9cm。茎幅1.8cm。背厚0.8cm。茎厚0.4cmを測る直刀である。茎には2個の目貫孔があり。刃部への関はゆるやかに走る。

鉄鎌(第20図1) 1個。厚さ0.4cm,幅2cmの鉄鎌の先端部の破片である。断面は杏仁形を呈する。

その一部分に木質が付着している。他に3個の破片がある。そのうち2個の裏面には縁辺から約0.6~0.2cmの間隔をおいて、弧状の縁辺と平行な湾曲をしめす漆膜の外縁を認める。

5は厚さ0.1cmの薄い鉄板である。一辺は一部がやや外湾しているが、他辺はわからない。前記の板状鉄製品の一部に類似している。

6は厚さ0.1cmの薄い鉄板を使って、一部を板状に密着するまで折りまげているのに対して、他の部分はU字形にされている。板状部端に径0.1cmの1孔を穿つ。

2は幅1.5cm、厚さ0.1cmの薄手の帯状の鉄片で、縁部は鋭利でない。木質の付着を認める。

3) 墳頂部、墳丘断面及び表面採集品

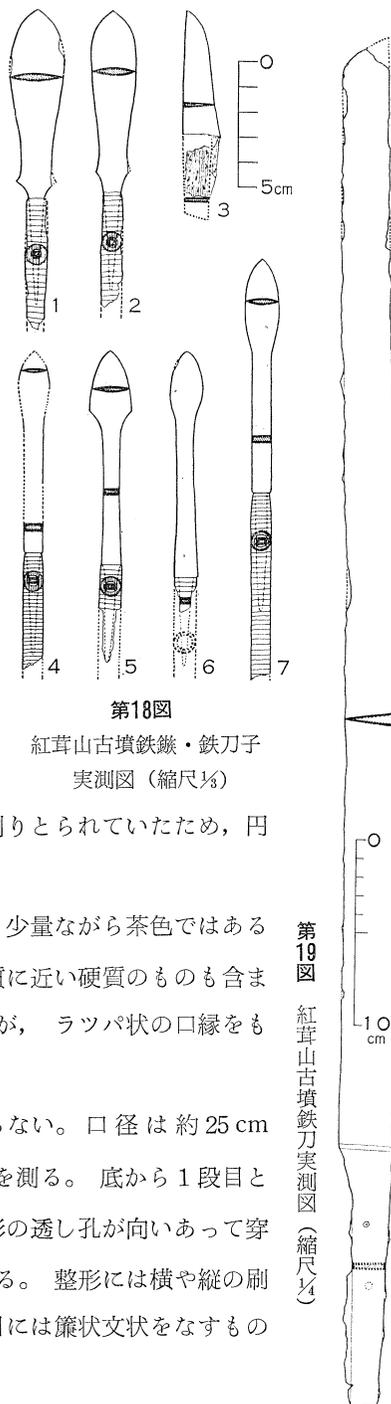
円筒埴輪 (第21・26図)

方墳北辺の裾で一直線に並ぶ5本の円筒埴輪列の遺存を認め、さらに、墳頂部その他墳丘の各所でリング箱一杯分の破片を発掘ないし採集した。東・西・南の各辺では、墳丘が削りとられていたため、円筒埴輪はほとんど検出されなかった。

円筒埴輪は黄褐色を呈するものがほとんどである。少量ながら茶色ではあるが、須恵質のものもある。黄褐色のものでも、須恵質に近い硬質のものも含まれている。ほとんどが直立する口縁部をもっているが、ラツパ状の口縁をもつ、朝顔形のものも認められる。

原形を完全に復元できるものは皆無で高さはわからない。口径は約25cm以上、底径は18.2~26.2cm、厚さは0.7~1.1cmを測る。底から1段目と2段目との箍間には、直径約5cmの円形ないし楕円形の透し孔が向いあって穿たれている。輪積み成形を行なった痕跡も認められる。整形には横や縦の刷毛目がほどこされているが、とくに、横方向の刷毛目には簾状文状をなすものもある。

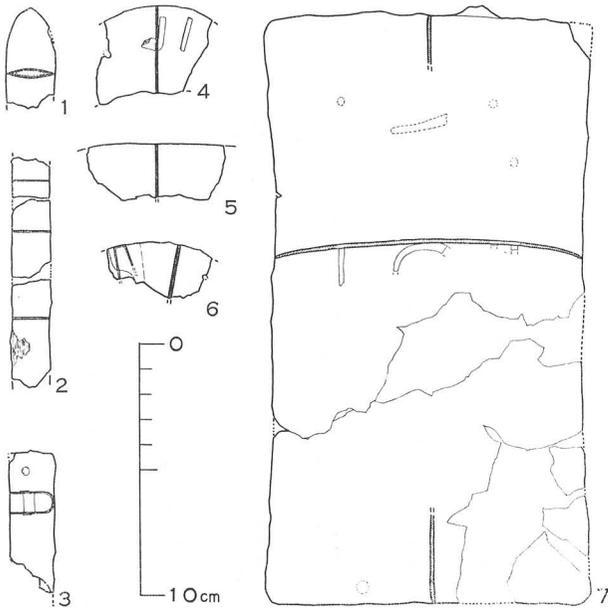
円筒埴輪列は大きさのまちまちのものからなり、①は底径26.2cm、厚さ0.8



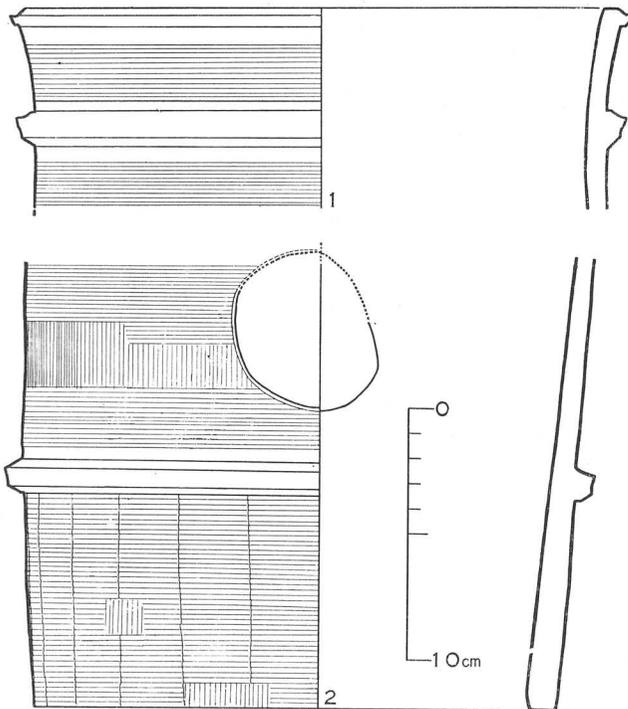
第18図

紅茸山古墳鉄鎌・鉄刀子
実測図 (縮尺1/4)

第19図 紅茸山古墳鉄刀実測図 (縮尺1/4)

第20図 紅茸山古墳鉄器実測図（縮尺 $\frac{1}{4}$ ）

cm, 籬間の距離は 11.5 cm である。②は底径 18.2~19.5 cm, 厚さ 0.7~1 cm, 底から第1段の籬までの高さは 8.3 cm である。その籬の上に向いあった円孔があり, 縦方向の刷毛目が見られる。③は底径約 23 cm, 厚さ 1 cm, 底から第1段の籬までの高さ 8.5 cm である。横方向の刷毛目が見られる。④(第21図)は底径 20 cm を測る。⑤は楕円形透孔をもち, 縦横の刷毛目が見られる。厚さ 0.3 cm, 籬間の距離 10.5 cm である。

第21図 紅茸山古墳円筒埴輪実測図（縮尺 $\frac{1}{4}$ ）

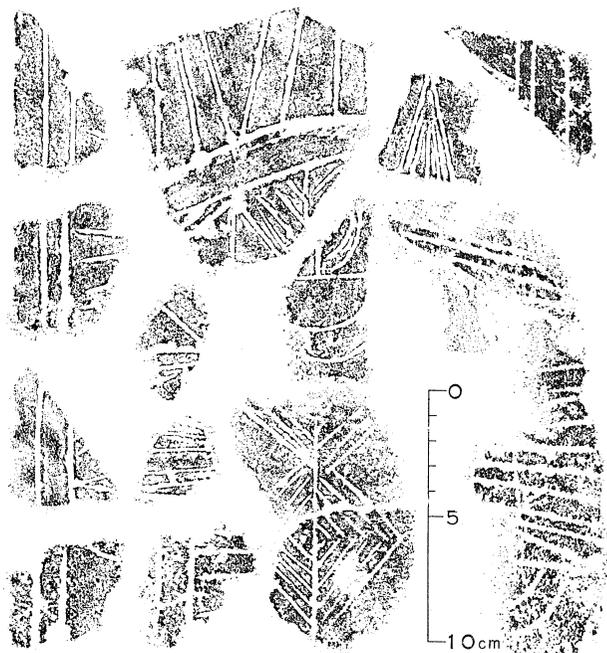
形象埴輪 (第22・23図) 形象埴輪には盾・靱・家その他がある。盾・靱・家は各々2個体ないし数個体の破片で, 原位置はわからないが, 墳頂部および南棺墓壇の盗掘壇内から検出したことによって, もと墳頂部に樹立されていたものと推定される。

盾は全体の形制がわからないほどの破片ばかりである。鋸歯文や連続菱形文を線刻した部分がある (第22図)。

靱も破片が完存しないため, 全体の大きさや形制はわから

ない。しかし、鏝を線刻した破片、直弧文をほどこすもの、鱗部などが認められる(第23図)。

家形埴輪は、粘土板をはりつけて柱形を表現したものが3種ある。その1は、柱間の水平材を綾杉文の線刻によってあらわし、その2は、柱と水平材とを同一面に浮きださせ、その3は、柱形を高く水平材を低く2段に浮きださせたものである。屋根の破片には、



第22図 紅茸山古墳盾形埴輪拓影(縮尺1/4)

網代の表現はないが、棟をおおう凸帯をあらわしたものや、妻の破風板の破片などがある。床の部分にある破片は、下辺に半円形の切りとりがあり、水平材の下縁に接して、さらに突出した縁側状の表現をおこなっている。なお、家形埴輪には赤色顔料を塗彩したものがある(図版第7)。

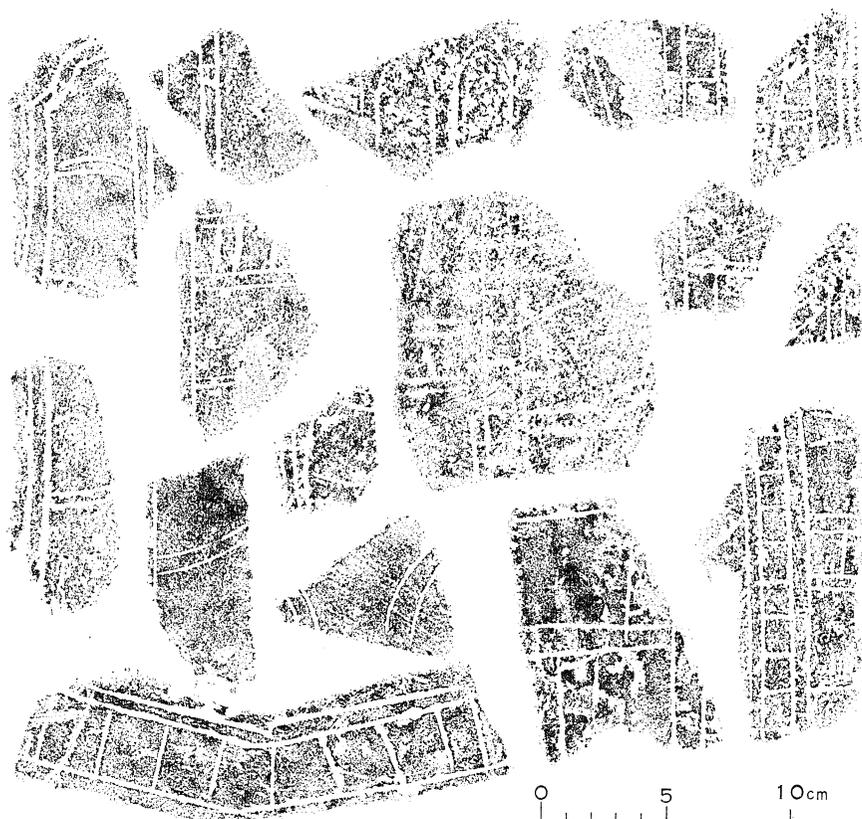
図版第7の右下の破片のみは、家以外のものかと思うが、なにをあらわしたものかわからない。

須恵器 表土中より、須恵器の壺ないし甕の体部破片を数点検出した。この古墳の副葬品と認めるものか混入品かはっきりしないが、須恵質埴輪の存在から、この古墳との関係を考^④えてもよいと思う。

4) 墳丘下底部出土品

弥生式土器(第24図) 古墳直下の弥生時代遺物包含層より多数の弥生式土器が出土している。甕・壺・高杯・鉢などを認めるが、いずれも畿内第5様式に属するものである。

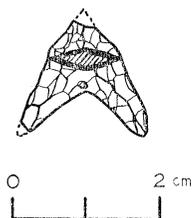
甕形土器(第24図1~4) 口頸部が「く」字形になっていて、口縁端が丸味をもっているもの(1)や角ばっているもの(2)、さらにその口縁端に刻み目のあるものなどのほか、口縁端を逆に内方へ折りかえし、口頸部でなめらかに湾曲して、胴部へつづくもの(3・4)もまれにある。「く」字形の口頸部をもつ1には表面に叩目を施し、口縁は横なでに整形し、



第23図 紅茸山古墳轆形埴輪拓影(縮尺1/4)

内面は篋で削った痕跡もみられる。黄褐色を呈し、かなり大粒の砂を含み、焼成もよくない。2の口頸部には縦の刷毛目がみられる。黄褐色を呈し、砂多く、焼成も悪い。3・4は赤褐色を呈し砂粒を非常に多く含み硬質である。

壺形土器(第24図5~9) 壺には3種あって、大きく外反する口縁部におそらく球形の胴部をもつもの(5~7)と、太長い口頸部に縦長の胴をもつもの(8・9)、扁球形の胴部におそらく細長い頸部をもつもの(11・13)とが認められる。第1種には口縁部がなめらかに頸部へうつるもの(5・7)といった内方へ折るかえし、頸部へうつるもの(6)とがある。7の口縁端部には4条の凹線がみられ、さらに円形浮文を貼付したのち竹管文をおしたのものがある。それぞれ黄褐色・茶褐色・赤褐色を呈し、焼成はよくない。砂を多く含むもの(6)と少ないもの(5・7)とがある。第2種の壺には厚手で黄褐色を呈するもの(8)と薄手で赤褐色を呈するもの(9)があって、いずれも砂粒多く、きわめて脆い。第3種では頸部を失っているが、胴の張った体部が長頸壺を思わせる。黄褐色を呈し、砂多く脆い。



第25図
紅茸山古墳基底部出土
石鏃実測図(実大)

底部(24・25)とがある。外面は、叩目で整形され(20・24・25)、すずの付着するもの(24)がある。また、内面を刷毛目で整形されたものもある。いずれも砂粒が多く脆い、底径は3.4~8.4cmを測る。底部が上げ底のものには、中央の一部が円形に凹んでいるもの(22・23)と底面の凹みが著しく、その外周部があたかも高台のような効果を果しているもの(26・27)、さらに、底面が球面状にくぼんでいるもの(28・29)との3種がある。いずれも叩目はない。27のみ内面に楕円形整形痕を認める。26・27は底面の外側に指圧痕や指紋を認める。27を除いていずれも砂多く脆い。

石鏃(第25図) 1個。サヌカイト製。三角形凹基式で、入念に打製され、鋭利な感じを与える。

- 注 ① 未永雅雄・島田暁・森浩一『和泉黄金塚』P.87, Fig.46, 1954。
 ② 後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」(『日本古代文化研究』P.581, 1942)。
 ③ 秋山日出雄・網干善教『室大墓』P.55, Fig.27, 1959。
 ④ 因みに、高槻市辨天山12号墳において、埴輪列中に須恵器甕が検出されている。大阪府教育委員会・高槻市教育委員会『辨天山古墳群発掘調査概要』, 1963。

第6節 結 語

最後に、紅茸山古墳の年代や被葬者の問題について若干ふれて結語としたい。

紅茸山古墳には、外部施設として、形式的ながら葺石があり、各種の埴輪についてもしっかりしたものである。内部構造は木棺直葬であって粘土槨ではないが、南棺では少量の粘土をもって被覆している。また、出土遺物を見ると、勾玉・管玉・櫛などがある。管玉は細く年代的にそれほど下降するものではない。櫛は6世紀に入るとほとんど見られないものである。鉄鏃も大阪府和泉黄金塚古墳、奈良県室大墓古墳および奈良県五条猫塚古墳などの中期古墳の出土遺物に類例を見出す。したがって、出土遺物のなかには、中期古墳との共通性ないし親縁性が見られるのである。

一方、紅茸山古墳は方墳であるが、その各辺が東西南北の方位に合致している。同様な方位を示す古墳は中期古墳から見られ、奈良県小那辺古墳の陪塚にその例が知られる。そして、埴輪のなかにも、須恵質の円筒埴輪が若干混入する。須恵質の埴輪や須恵器を伴う古墳が

中期の中頃以後に認められることは、その実例を指摘するまでもなく、しばしば報告される。これらの事実は中期古墳のなかでも新しい性質として考えられる。

このように見てくると、紅茸山古墳の年代は、古式の傾向の中にも新しい要素の見られることから、5世紀の後半の1点に求めたいと思う。

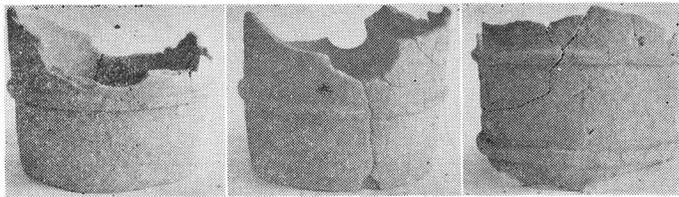
次に被葬者の問題である。紅茸山古墳に先行する古墳を付近に求めると、すぐ西方に上述の高槻市大字別所字奥阪に所在した古墳をあげることができる。おそらく、安満や成合の地区に何らかの関係をもったものの奥津城であろう。

5世紀の三島地方には、強大な権力によって、平野の真っ只中に、大前方後円墳（茶臼山古墳=伝継体陵）の築造という大土木工事をなしたような天皇級の大勢力が形成され、地域的な統一の政権を掌握していたと推定される。紅茸山古墳の被葬者は、茶臼山（伝継体陵）や今城塚の被葬者を頂点にいただく三島地方の統一政権のヒエラルヒーを構成した中小豪族ではなかったろうか。

付記 紅茸山古墳についてはすでに次の2編に概要を示している。

『高槻市教育研究所報』第26号，1961。

『高槻市文化財年報』1961年度，1962。

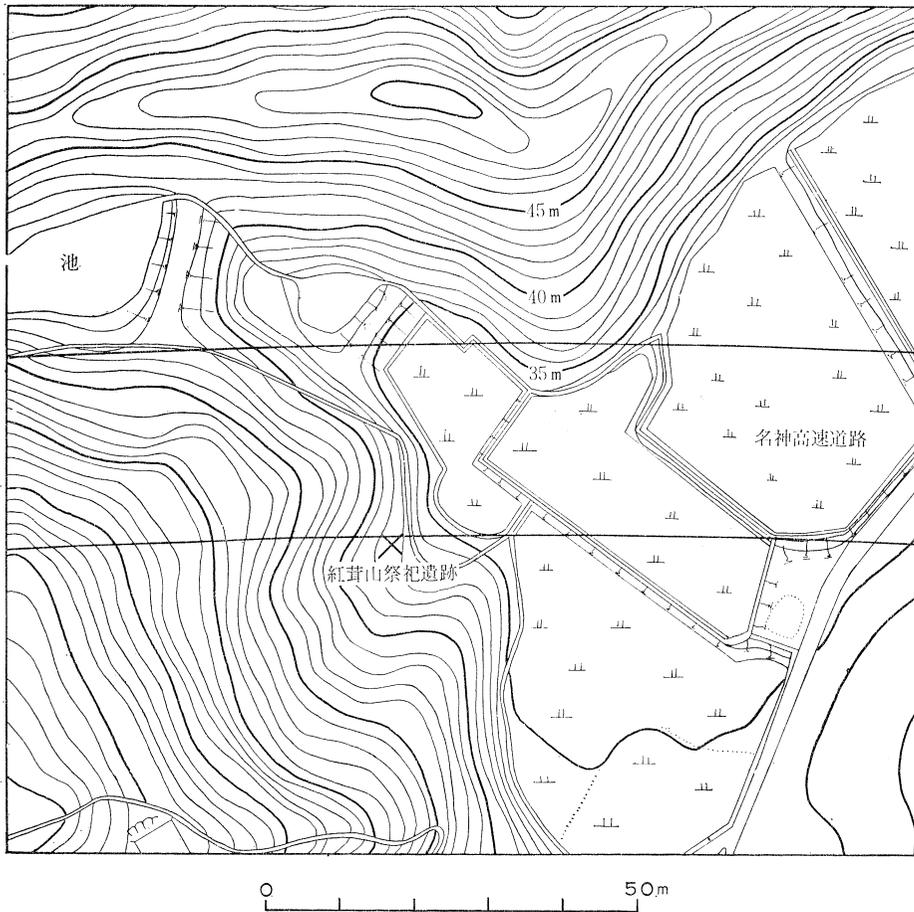


第26図 紅茸山古墳円筒埴輪

第2章 紅茸山祭祀遺跡の調査〔図版第8・9〕

1961年5月、高槻市教育委員会による紅茸山古墳調査中に、高槻市別所の服部茂氏の教示をうけて、紅茸山古墳の西北約350mにあたる紅茸山の北麓で、須恵器の出土したことを知った。そこで、現地を踏んだところ、土砂くずれによって、赤い山肌のみえている傾斜面の一部に、須恵器壺や紡錘車などの露出していることを認め、付近を精査したところ、さらに、須恵器蓋杯などを検出した。

遺跡は高槻市安満池内579番地の地籍に属し、東西にのびる低い紅茸山丘陵の北麓にあた



第27図 紅茸山遺跡地形図 (縮尺1/1000)

り、海拔 33 m の標高を測る。成合地区と安満地区とをわける檜尾川の磐手橋を基点にしていえば、そこから西方に向って入りこんだ狭い谷の、水田に面した一番奥のところにある(第27図)。

遺物の出土した場所はかなり急な傾斜面の下部で、少しく地表面の凹まったところであって、す

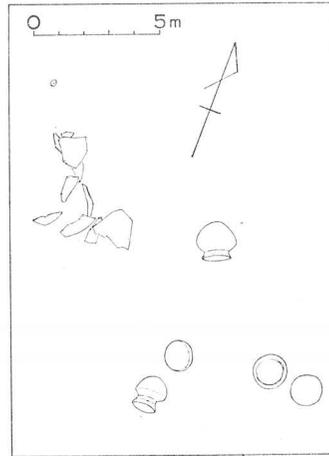
ぐ背後には丘陵の尾根をひかえているが、景勝の地ではない。

出土地点や遺物の出土状況(第28・29図)の観察によると、須恵器などを副葬した古墳のあった形跡はなく、須恵器を焼いた窯跡の存在を立証する窯壁・灰原・不良須恵器類もまったく見られない。また、傾斜が急で住居に不相当であり、住居跡も認められない。出土地点から上部も同じような傾斜が続いているので、そこに住居跡があつて土器が捨てられたことも考えられない。あるいは何らかの祭祀遺跡かもしれない。しかし、祭祀遺跡と考えた場合でも、付近に依代と推定しうる顕著な地形地物は見あたらないので、祭祀の対象などもわからない。

出土遺物(第30図)は蓋杯・壺・紡錘車・鉄器片などであるが、土砂くずれのため、器台・高杯などの他の器形の土器が散逸しているかもしれない。遺物は次頁の表に示したとおりである。ただし、須恵器は穀塚形式に相当する。

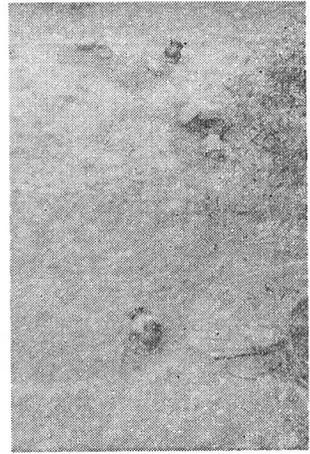
類似の地形や出土状況を示すものは、1960年3月、高槻市古首部鷲塚813番地付近の大丸総合体育センター建設工事現場(当地より西方約600m)でも認められ、本遺跡と同時期の須恵器蓋杯・碌、土師器埴などが出土した。また、高槻市以外では、岸和田市の八幡山遺跡などを類例としてあげられる^①。

なお、調査は、当時の同志社大学大学院学生水野正好、同志社大学学生八木久栄・田代克己・三木倭子、立命館大学大学院学生喜谷美宣、立命館大学学生村上紘揚・岡村稔・葛原克人および奈良学芸大学学生西谷正らが参加して行なった。



第28図

紅茸山遺跡遺物出土状況図(縮尺1/4)

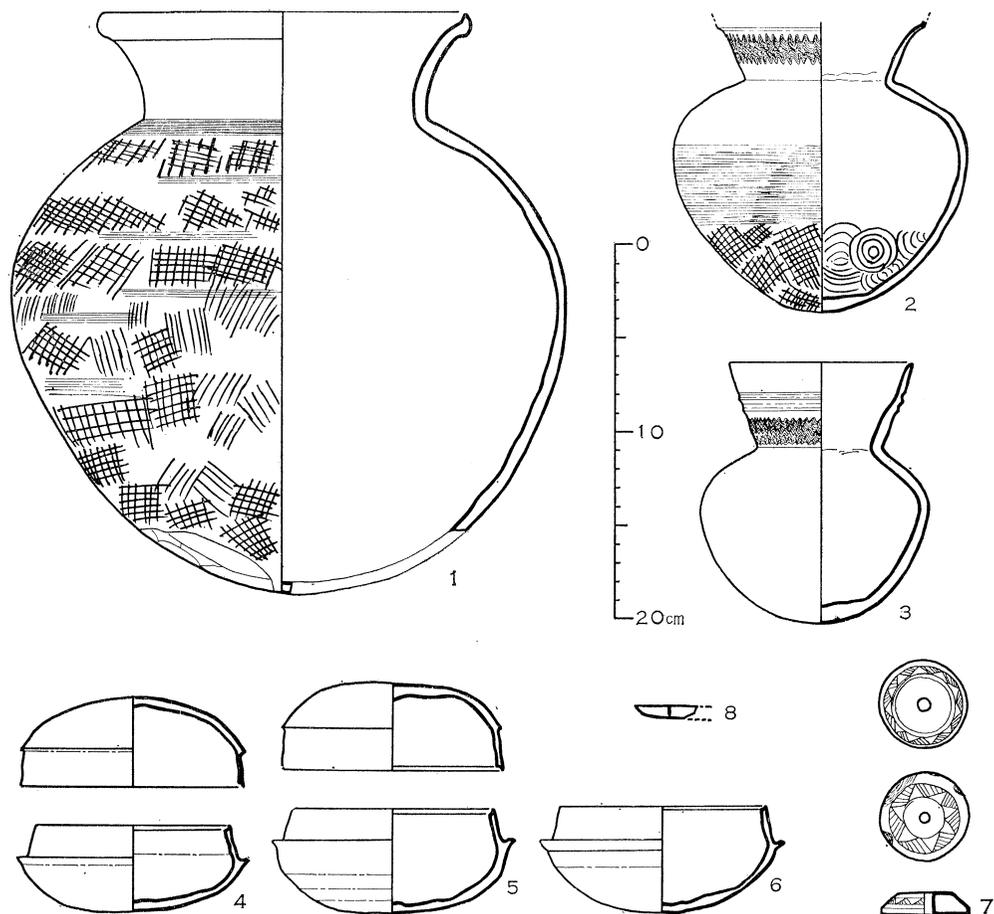


第29図

紅茸山遺跡遺物出土状況

出土遺物表

名称	口頸部	体部	底部	色調	質	挿図
広口壺	短く外反する口頸部でその上端は断面が半楕円形を呈する。	なだらかに下りる肩で、下方へゆるやかに下りている。外面には叩目が残し、その上を楕円形のもので横になでて仕上っている。内面凸凹。	丸底、叩目底部付近に直径約5cmの円孔。(焼成後)	青色ないし灰白色。	焼成あまりよくない。	第30図1
壺	短く外反する口頸部で、その上端部付近で少し内曲する。頸部には細い楕円波状文がある。	上部細い刷毛目、下部叩目。内面下部青海波。凸凹多い。肩はやゝ張り、ゆるやかに下方へ屈曲する。	丸底。	暗黒色ないし灰白色	砂粒かなり含み、焼成あまりよくない。	第30図2
直口壺	外に傾斜して立つ口頸部で、その中央に二本の凹線が走っている。頸部下半には楕円波状文。内面横になでて仕上げる。	やゝ張った肩からゆるやかに下方へ下りる。厚手である。	厚い丸底。	青色。	焼成良好。	第30図3
蓋杯	ほぼ直立する口縁。厚みは薄く深い。	厚みは薄くやゝ深い。	底部上面は丸い。刷毛目が横につく。	暗灰色ないし黄灰色	堅緻。砂粒を少し含む。	第20図4
	立ち上がりは高く、上端には細い凹線がめぐる。	厚みは比較的薄くやゝ深い。	丸底、刷毛目が横につく。	暗灰色	堅緻。砂粒を少し含む。	第30図4
蓋杯	ほぼ直立する口縁。厚みは比較的厚く深い。	厚みは比較的厚く深い。	上面は丸く把手はない	灰青色	焼成良好。	第30図5
	立ち上がりは高く、上端には細い凹線がめぐる。	厚みは厚く深い。	丸底。×の窯印。	黄灰色	堅緻。微量の細砂を含む。	第30図5
杯	立ち上がりは高く、上端には細い凹線がめぐる。	厚みは薄く深い。	丸底、荒い刷毛目が横に走る。一直線の窯印	暗灰色	焼成良好。	第30図6
紡錘車	直径約5cm、高さ1.25cmの滑石製。中央に径0.6cmの円孔がある。断面は截頭円錐形。斜面及び裏面には二重の同心円の間に細線の鋸歯文が刻まれている。					
鉄器	現状では幅7.5mmを測るが、刀子あるいは鏃の断片と考えられる。厚さ1.5mmで薄い。					



第30図 紅葺山遺跡出土遺物実測図(縮尺1/4)

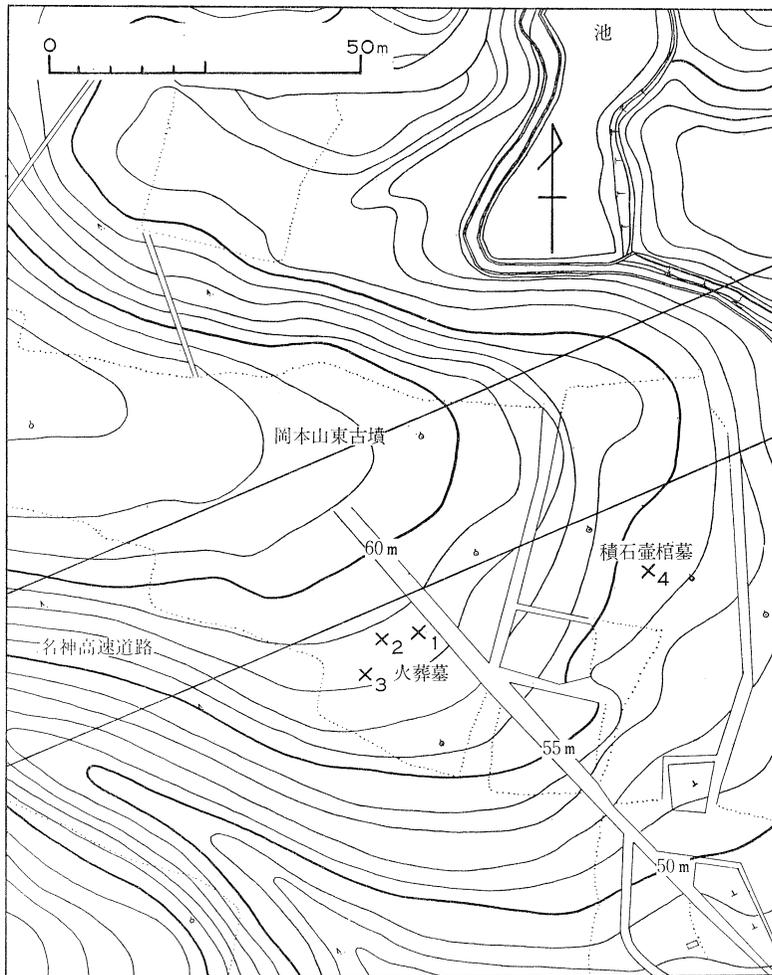
注 ① 堅田直『八幡山遺跡発掘調査概要』1961。

ほんじ
本寺の字名や、さらに無数の石塔・石仏群などの遺存との関連が考えられ、古代・中世を通じての仏教遺跡として注目される。

調査は当時の奈良学芸大学学生西谷正、同志社大学学生田代克己・伊藤久嗣・梶崎貞夫、立命館大学学生村上紘揚・葛原克人・熊野樞らが主としてあたった。

第1節 火葬墓 ① 〔図版第11 (2)〕

蔵骨器はブルドーザーのキャタピラーによって無残にも破壊されていたが、火葬墓の構造はかなりよく、実状が知られた。

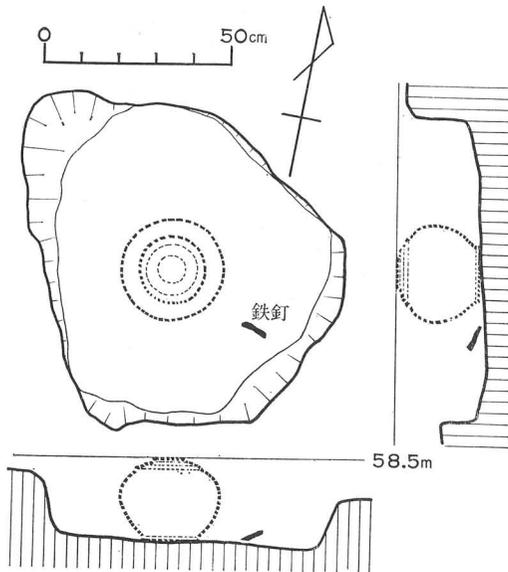


第32図 岡本山東地区地形図

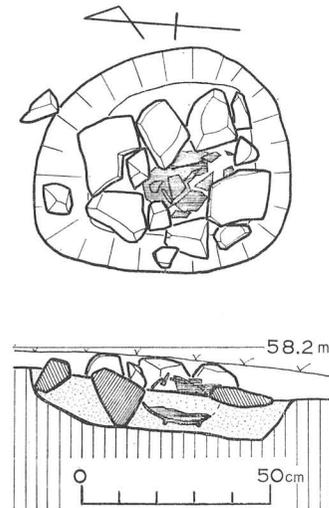
火葬墓①は特別の施設をもたないが、南北70cm、東西80cm、深さ20cmの不整形な墓壇を掘り、その中に蔵骨器が置かれていた(第33・35図)。壇内から、鉄釘1本を検出した。まわりに木炭と灰が認められたが、墓壇の内部や周囲で火葬された形跡はないので、他所で木棺に入れた遺体が火葬され、骨上げの際に、棺釘をも含んだ雑物が、蔵骨器とともに墓壇に埋められたものか、あるいは、蔵骨器を入れた木櫃に打たれた釘であったと推定される。

蔵骨容器は2個の須恵器を組み合わせたものである(第36・39図)。身は胴部直径26.7cm、高さ21cm、厚さ約0.8cmを測る壺である。最大径が中心よりも少し高いところにある楕円形に近い胴部に、直径12.8cmの高台をつけている。口縁部は低く直立したものと思うが、蓋をのせるために、完全に打欠かれていて、破片一つ見られなかった。外面には灰釉が塗られていて、灰緑色を呈する。胎土は白く、細砂粒をかなり含んでいるが、焼成はよく堅い。内面にも底から9cmの高さまで同様な灰釉がかけられている。

蓋は高さ3.55cm、厚さ0.4cm、直径17.6cmの有段皿を利用している。内外両面に段が見られ、底部には高台がつけられ、高台の内側の底部と接するところを横になでてできている。内面と外面の段の付近とに灰釉が塗られ、灰緑色を呈する。胎土に細砂粒を少し含んでいるが、焼成は良い。この有段皿の内面には別個体の底部の痕跡が残り、また、高台底には他の



第33図 岡本山東地区火葬墓①
実測図(縮尺1/20)



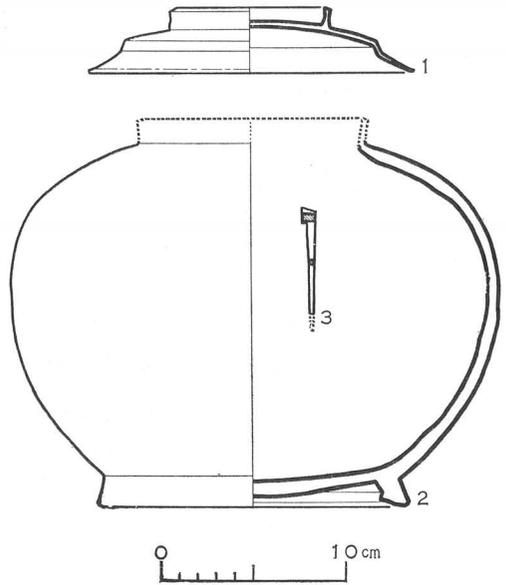
第34図 岡本山東地区火葬墓③
実測図(縮尺1/20)



第35図 岡本山東地区火葬墓①

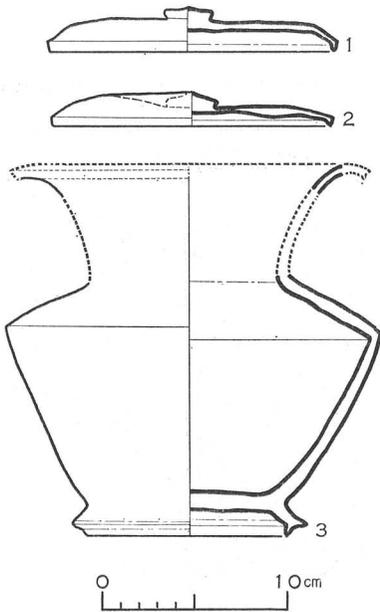
皿の一部が剝離して付着しているの
で、「トチン」を使わず、何枚か重ねて焼
かれたことが考えられる。

この壺と有段皿との胎質や形態は、愛
知県猿投山窯跡出土須恵器に酷似してい
る。年代も猿投山須恵器の編年^①に徴して、
11世紀頃の所産と考えられる。高槻に住

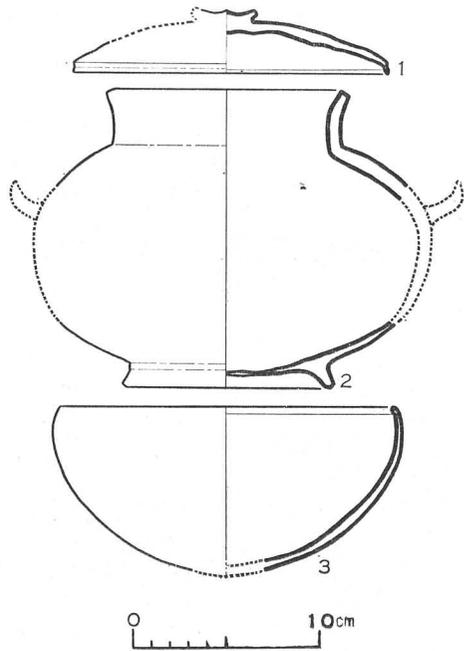


第36図

岡本山東地区火葬墓①出土須恵器実測図（縮尺1/4）



第37図 岡本山東地区火葬墓②出土
須恵器実測図（縮尺1/4）



第38図 岡本山東地区火葬墓③出土
須恵器・土師器実測図（縮尺1/4）

む貴族や高級僧侶らが、愛知県猿投山から容器を将来したが、その後蔵骨器に転用したとすれば、その歴史的関心は一層高まってくるわけである。

鉄釘は1本検出した。断面長方形、推定長7cmである。

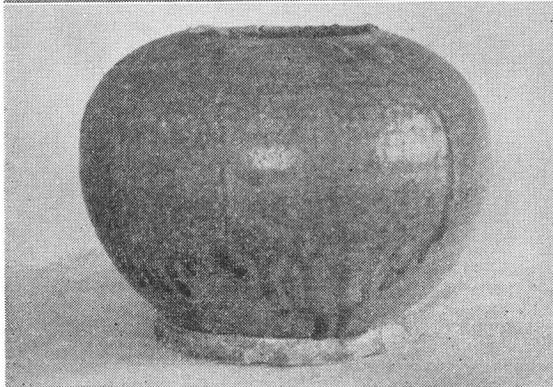
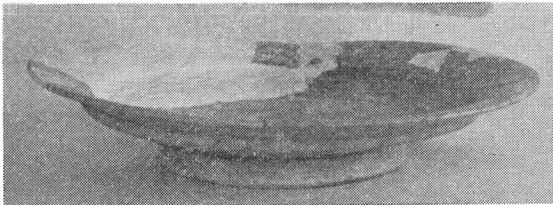
注 ① 橋崎彰一「猿投山須恵器の編年」（『世界陶磁全集』第1巻，PP.252・255，1961）。

第2節 火 葬 墓 ② 〔図版第11(1)〕

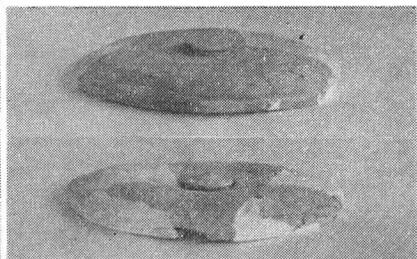
火葬墓②はブルドーザーによって踏みつぶされたために、出土状況や施設はまったく不明である。採集した土器の破片を復元していくと、須恵器壺1個と須恵器蓋2個とができあがった。蓋のうち1個は混入したものか、それとも壺の口縁部破片があるので、完形の壺の上に、蓋を2枚重ねたのであろうか（第37・40図）。

身は推定高20cm、胴部最大径20.4cmの広口壺である。恐らく長く外反する口頸部をもったものであろう。肩は強く張り、急に下方へ屈折する。底部には、短く裾びらきの高台がつく。肩部外面や、口頸部内面には茶褐色の自然釉がついている。胎土は青灰色を呈し、砂粒がかなり目につくが、堅く焼かれている。内部に少量の人骨片を残していた。

蓋は、平たいツマミをもつ。端部の断面は三角形を呈し、下方へ短く屈折する。灰青色で、砂粒も含むが焼成はよい。いずれも奈良時代のものである。



第39図 岡本山東地区火葬墓①出土須恵器



第40図 岡本山東地区火葬墓②出土須恵器

第3節 火 葬 墓 ③

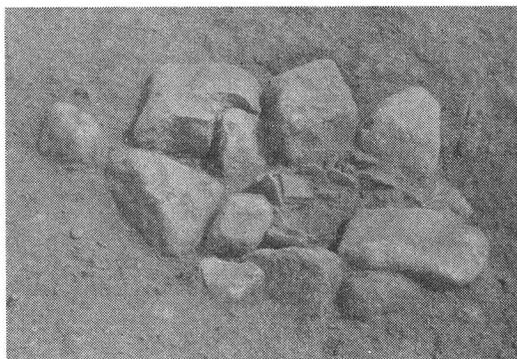
直径約 60 cm, 深さ 20 cm 以上の不整円形の墓壙を掘り, その中央より少し西南よりに蔵骨器をおく。蔵骨器の周囲は径 15 cm 内外の河原石で囲んでいる (第34・41図)。上部の構造や蔵骨器の出土状況は, すでに上半がブルドーザーで削平されていたために, はっきりしない。

蔵骨器は土師器壺に, 須恵器蓋をかぶせて構成される (第38・42図)。採集した土師器の破片を復元するとほかに土師器鉢ができたが, どのように使用したものかわからない。

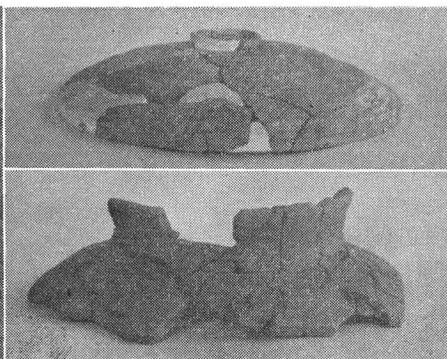
土師器壺は推定高 16 cm で, 扁球形の胴部にゆるく外反して立つ口縁部をつけている。底部には, 短く外方に広がる高台を踏んばるような状態でつけている。赤褐色を呈し, 砂をほとんど含まない精良な粘土を用いて, 軟質である。外面と口頸部内面とは, 刷毛で整形した後, 篋で仕上げられている。内面は胴部から底部にかけて, 凹凸が目立ち, 仕上げの整形が行なわれていない。

須恵器蓋は, 直径 17.1 cm, 高さ 3.5 cm を測る。蓋は中央で隆起して高く, そこに平たいツマミをつけている。端部は薄く押し出されていて, 外側に凹線が走る。青色を呈し, 細砂を少し含む。軟質で焼成はあまりよくない。

土師器鉢は口縁部径 11 cm, 高さ約 9 cm を測る。口縁部はゆるやかに内方へ屈曲し, 端部は横になでてつくられ, 凹線がつく。底部は恐らく少しは尖っていたであろう。内外両面ともに篋で研磨されている。赤褐色を呈し, 胎土には砂粒をほとんど含まず, 精良な粘土をもって焼成されている。軟質である。いずれも奈良時代のものであろう。



第41図 岡本山東地区火葬墓③



第42図 岡本山東地区火葬墓③
出土須恵器・土師器

第4章 岡本山東地区積石壺棺墓の調査〔図版第10(2)〕

ここに積石壺棺墓と呼んだのは、須恵器の壺を利用した壺棺を、積石をもって被覆したと推定されたからにはほかならない(第43図)。

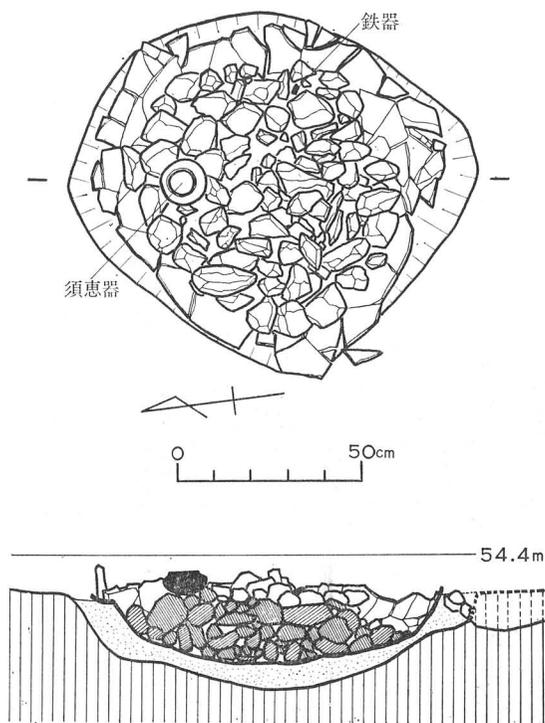
高さ約96cm、口縁部直径52cm、胴部最大復元径93.5cmの大壺の、底部から右肩中央までの、ほぼ $\frac{1}{3}$ を残してほかは打ち欠かれ、その壺の一部(第44図の実測図の胴部実線の部分)を、直径約1mの四角ばった円形の墓壙に埋めている。壺の残存部は底部を北に向けて水平に置かれたように見えるが、復元形から見れば壺の縦の中軸線は 52° の傾斜をもっている。

この壺の内部に、遺体を入れ、その上に積み石を行ない、さらに積石の上に、須恵器埴や鉄器を副葬していたものと推定される(第45図)。

なお、1956年頃に、当時、大阪府立島上高校生の福田修氏は、同地で、これと同一個体の壺上半部を採集されたことが、調査後になって判明した。この積石壺棺墓を上のように解釈

すれば、打ち欠かれた破片は、積石の上に被覆されていたとも考えられるのである。

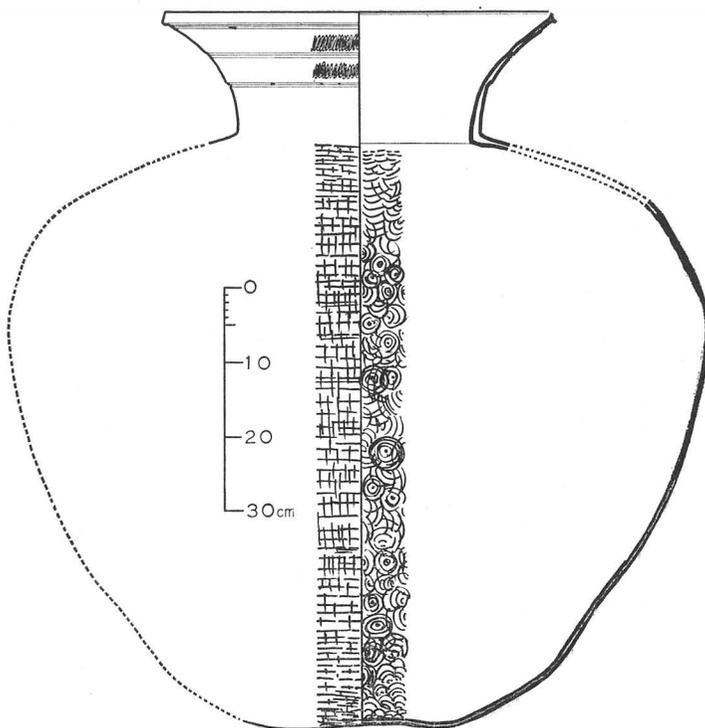
また、壺が完形で、 52° の傾斜をもって埋められたとも考えられるが、口頸部直径60cmのところ、遺体の埋葬ないし改葬を行ないえたとしても、その上に積石を行うのは不便と考えられるので、上のような解釈をしたわけである。日常的な実用の壺などの口縁部を打ち欠くことは、壺棺葬法によく見られることである。埋葬に甕や壺を利用することは古墳時代にもしばしば行なわれる。また、遺体に積石を行なうことは、東西古今に自然に行なわれている葬法である。同様の積石壺棺墓と



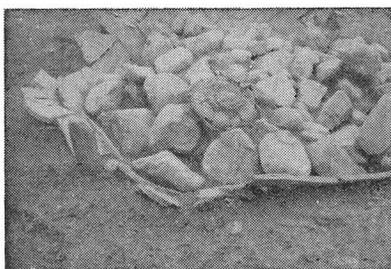
第43図 岡本山東地区積石壺棺墓実測図(縮尺1/20)

推定されるものは、大阪府枚岡市内においても藤井直正氏によって調査されたことがある。それは、^①壺の胴部から底部にかけての一部を利用したものである。横穴式石室が行なわれた時代にこのような簡素な葬法も行なわれたことは、階級差の様相を想起させて甚だ興味深い。

須恵器壺 (第44図) はゆるやかに下がる肩部を有し、胴部最大径は中央より少し上にくる。厚さ約1cmの胴部は内外ともに青色を呈している。外面には格子文叩目がみられ、内面は同心円文叩目を施している。堅く焼かされている。底から15

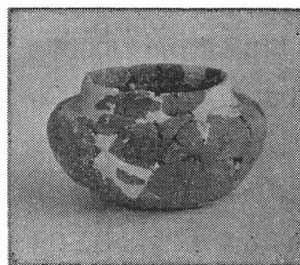


第44図 岡本山東地区積石壺棺墓須恵器実測図 (縮尺1/10)



第45図

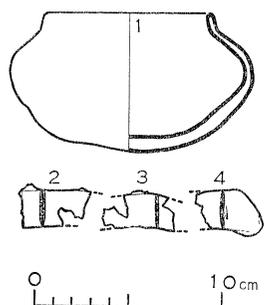
岡本山東地区積石壺棺墓
副葬須恵器出土状況



第46図

岡本山東地区積石壺棺墓
副葬須恵器

cmのところには、幅2.5cmに横方向で斲削りが行なわれている。口縁部は大きく外反し、2条からなる横方向の凹線が3段に平行に走り、その間は楕円描き波状文をもつてうめられている。底部は丸く、その位置もはっきりしないが、青黒色を呈し、磨滅した部分をもって胴部と区別できる。

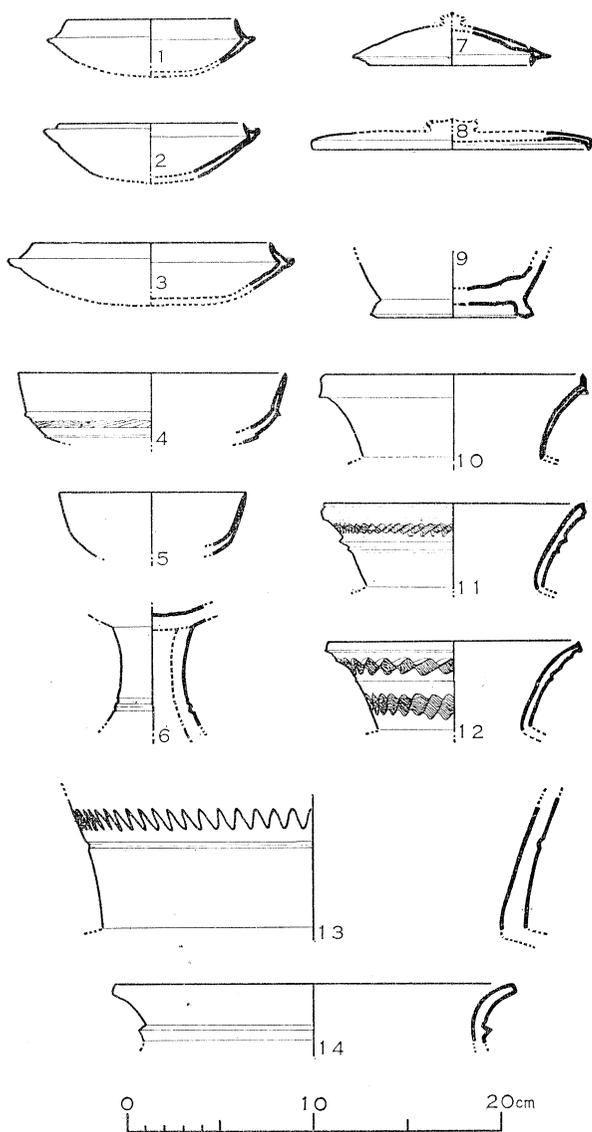


第47図

岡本山東地区積石壺棺墓
副葬遺物実測図（縮尺1/4）

副葬須恵器埴（第46図・第47図1）は丸い肩からゆるやかに底へと屈曲し、短い口頸部が、やや内へ傾いて立っている。灰青色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成悪く、軟質で脆い。

同じく積石の上に副葬されていた鉄器（第47図2~4）は、幅が2 cm前後で、長方形のもの（2）と少し湾曲するもの（3・4）とがある。また、一側に刃を有するもの（2・3）と両側に刃をもつかのように見えるもの



第48図 岡本山東地区発見須恵器実測図（縮尺1/4）

の（4）とがあるが、同一個体のような外観を呈している。用途は不明である。

調査期間中に、ブルドーザーで攪乱された地区付近で、須恵器の破片を若干採集している（第48図）。須恵器の示す年代が数型式、少くとも前後1世紀間を推定させるが、この中のいずれかは、前記の埴と同様に副葬されていた可能性を考慮することができるので、参考まで

に実測図を掲げておいた。

注 ① 枚岡市史編纂委員会『枚岡市史』第3巻史料編1，P. 168，1966。

付記 永年，三島郡の遺跡研究を続けていられる免山篤氏は，岡本山東区において須恵器蔵骨器のほか，瓦質土器・羽釜形土器など数点を採集されている。田代克己氏も青磁・須恵器・瓦質土器などを採集されている。いずれ，石仏・石塔群の調査をまっけて，総括的な研究を明らかにしたいと思っている。

また，1958年4月，名神高速道路路線上の遺跡分布踏査の際に，奈良時代後期の蔵骨器（須恵器）が採集されている（宮森正勝「高槻市岡本山出土の蔵骨器」『先史学研究』第2号，P. 38，1960）。



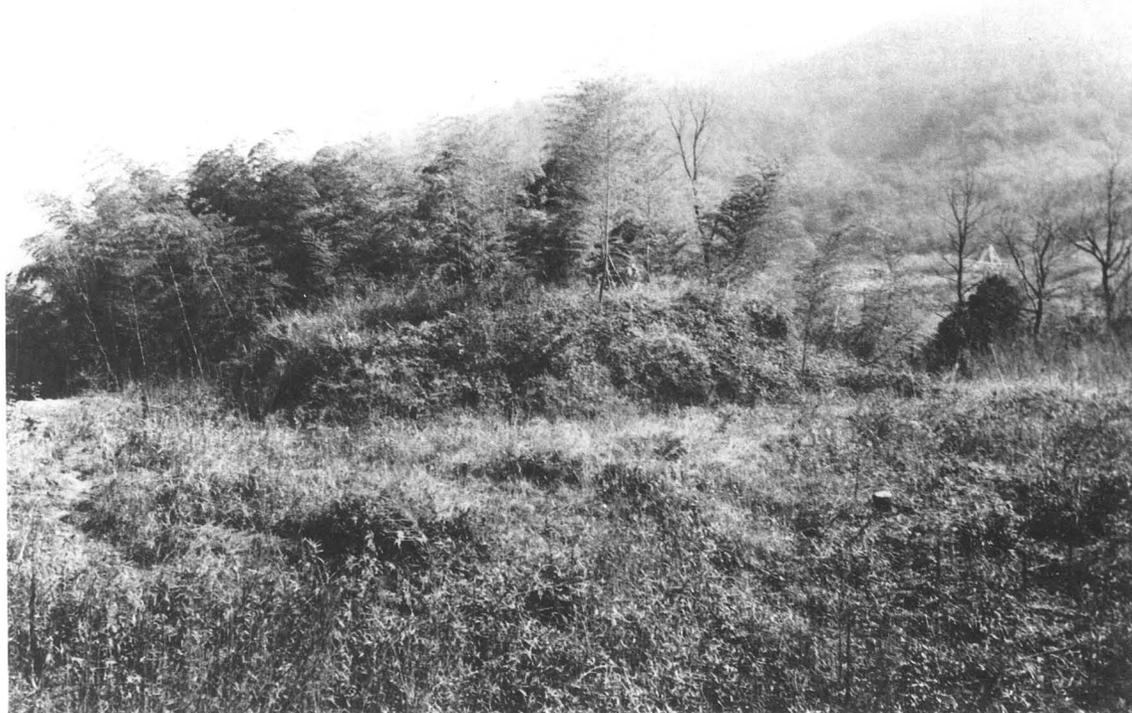
第49図 岡本山東地区の現状



(1) 航空写真



(2) 西方からの近景



(1) 西南方からの全景



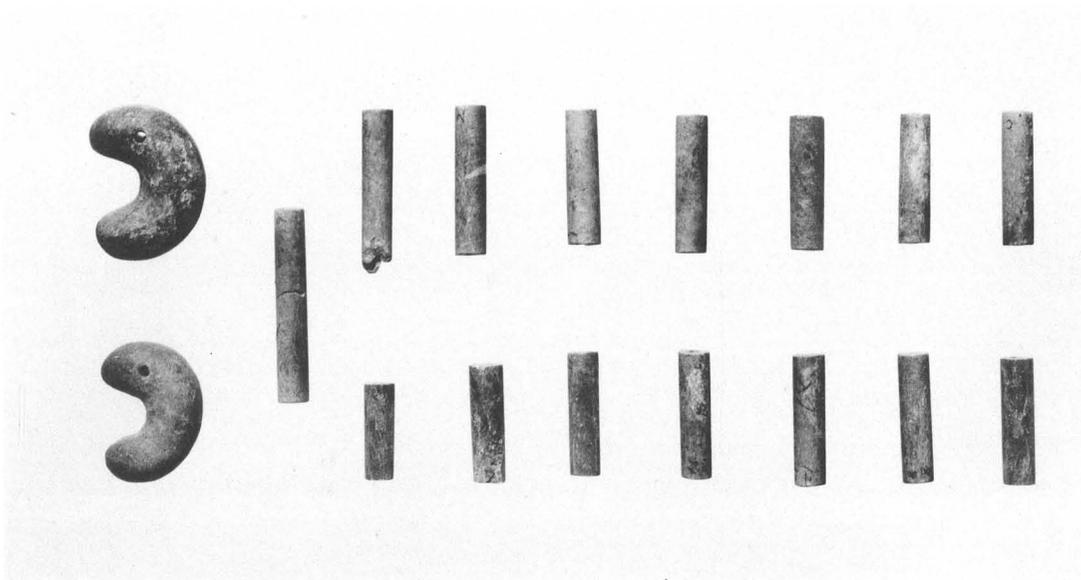
(2) 内部主体発掘状況



(1) 円筒埴輪列

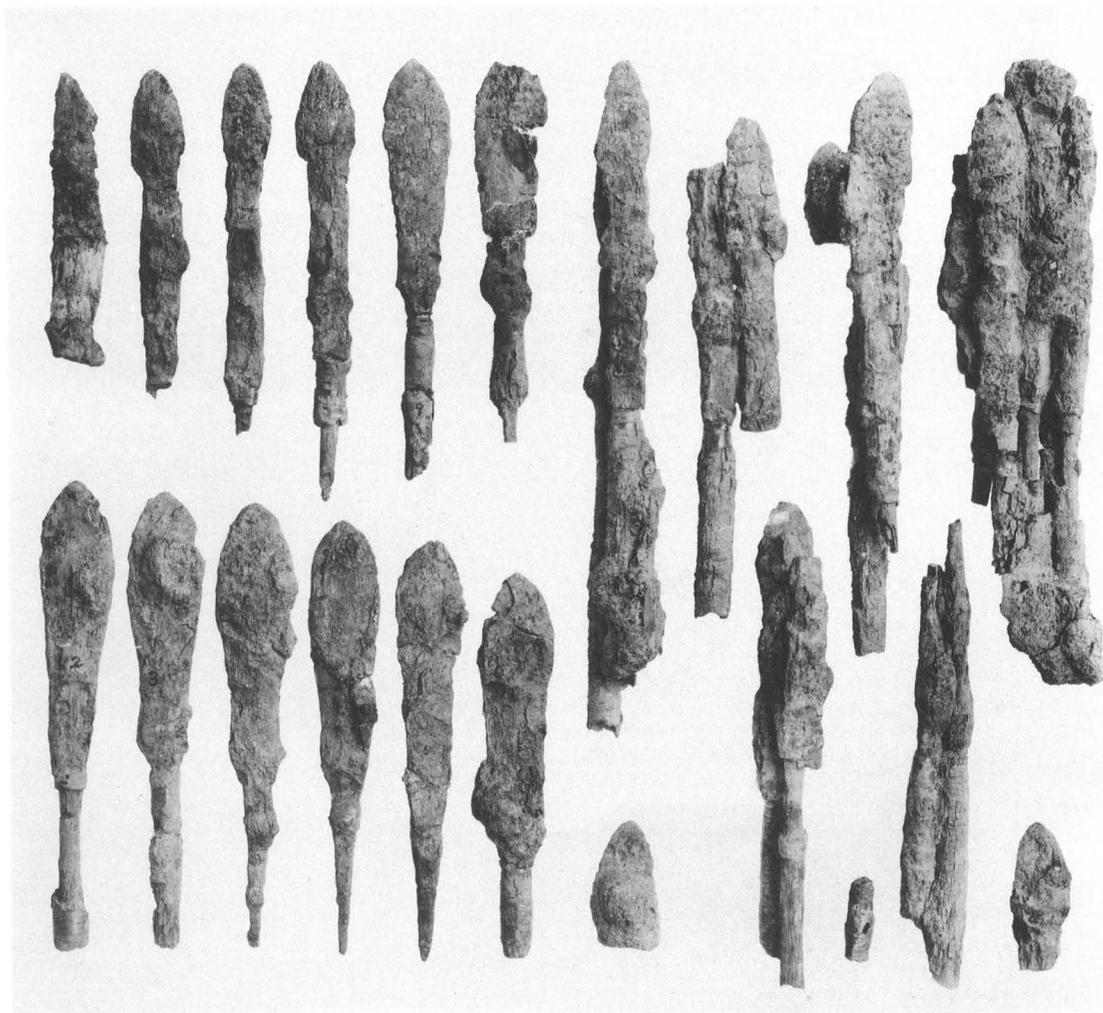


(2) 第 2 埋葬施設



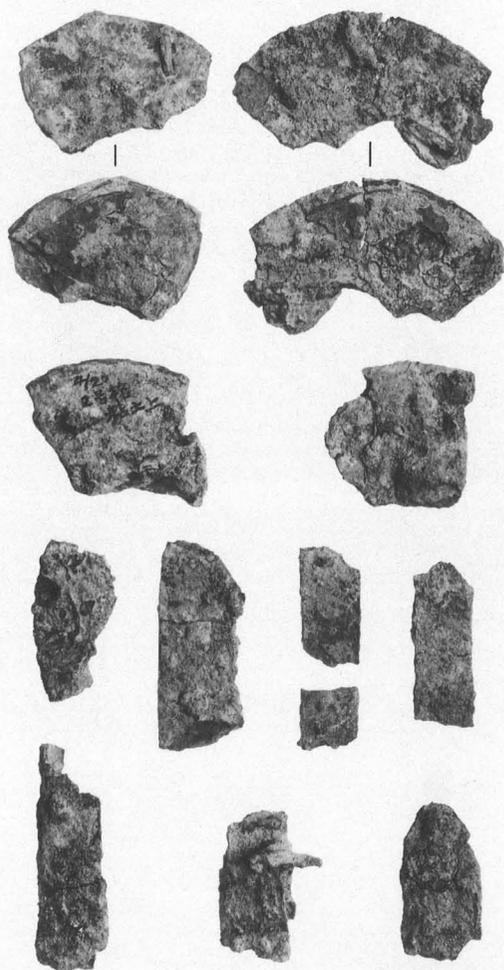
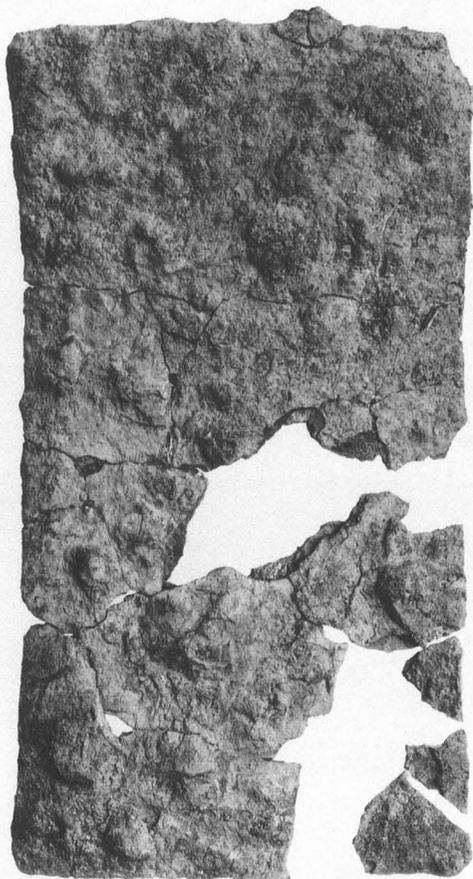
(1) 勾玉・管玉

1/1



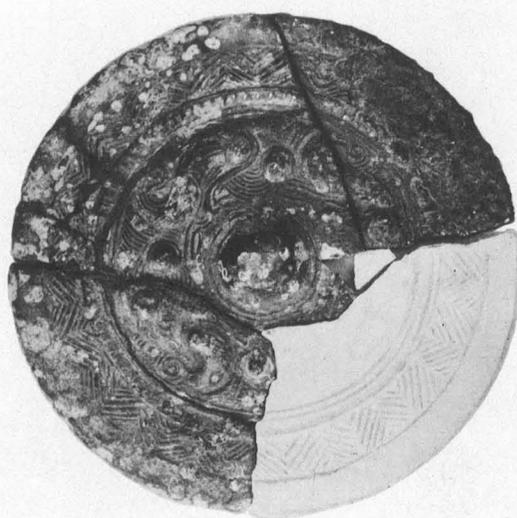
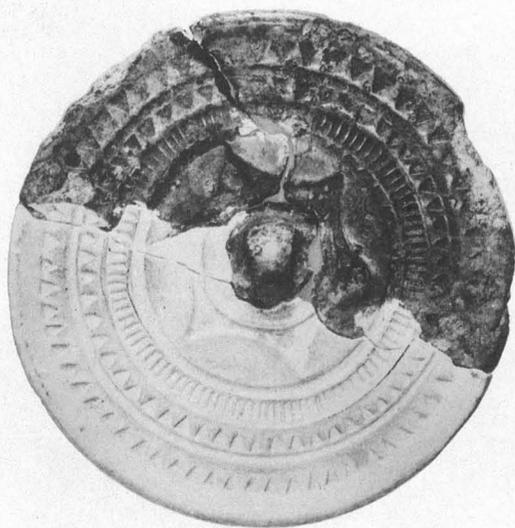
(2) 鉄鏃・鉄刀子

1/2



(1) 紅茸山古墳遺物 鉄製品

1/2



(2) 奥阪古墳遺物 鏡 (左内行花文鏡・右四獣鏡)



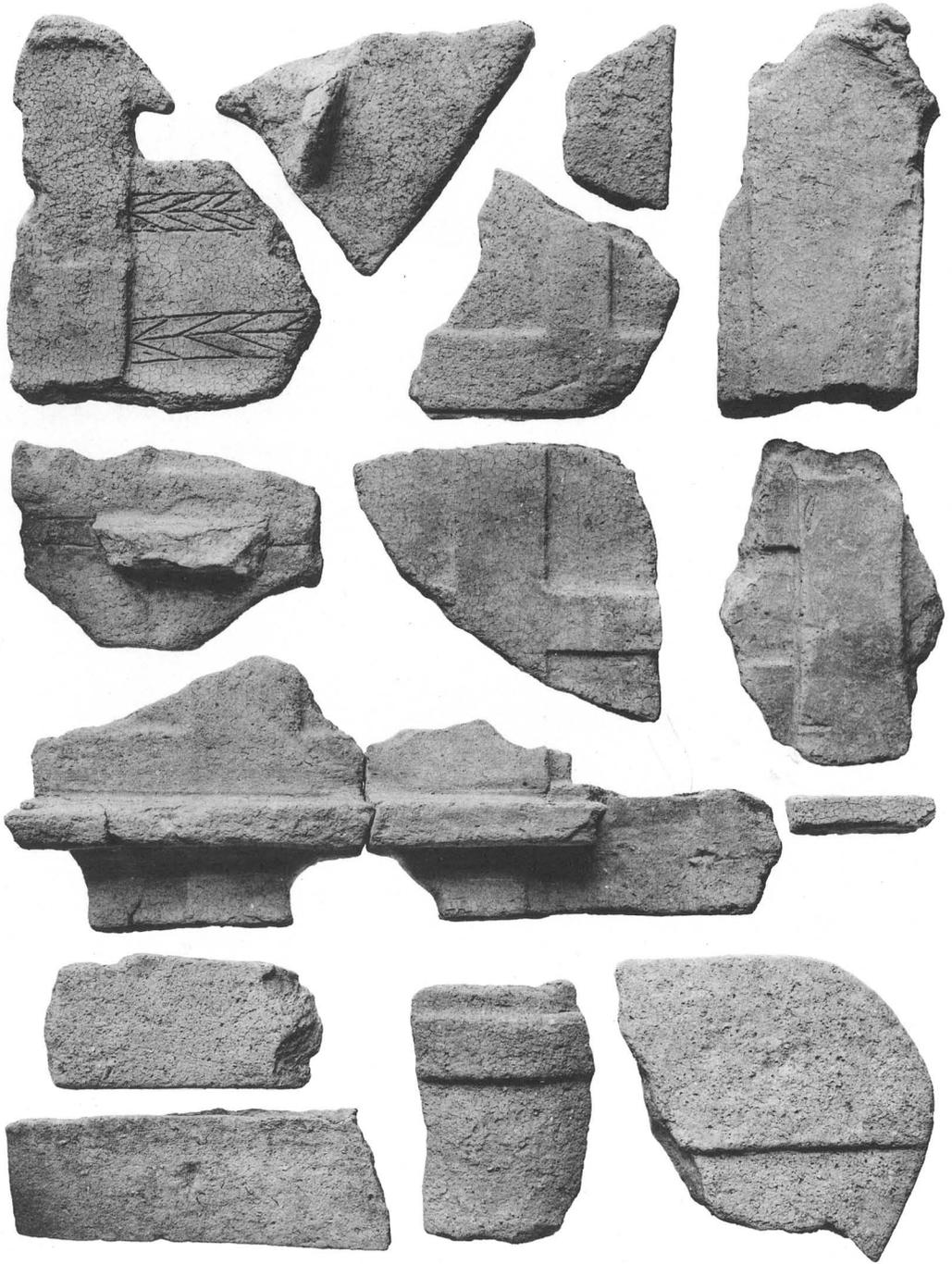
(1) 形象埴輪 (盾)

1/3



(2) 形象埴輪 (軛)

1/3



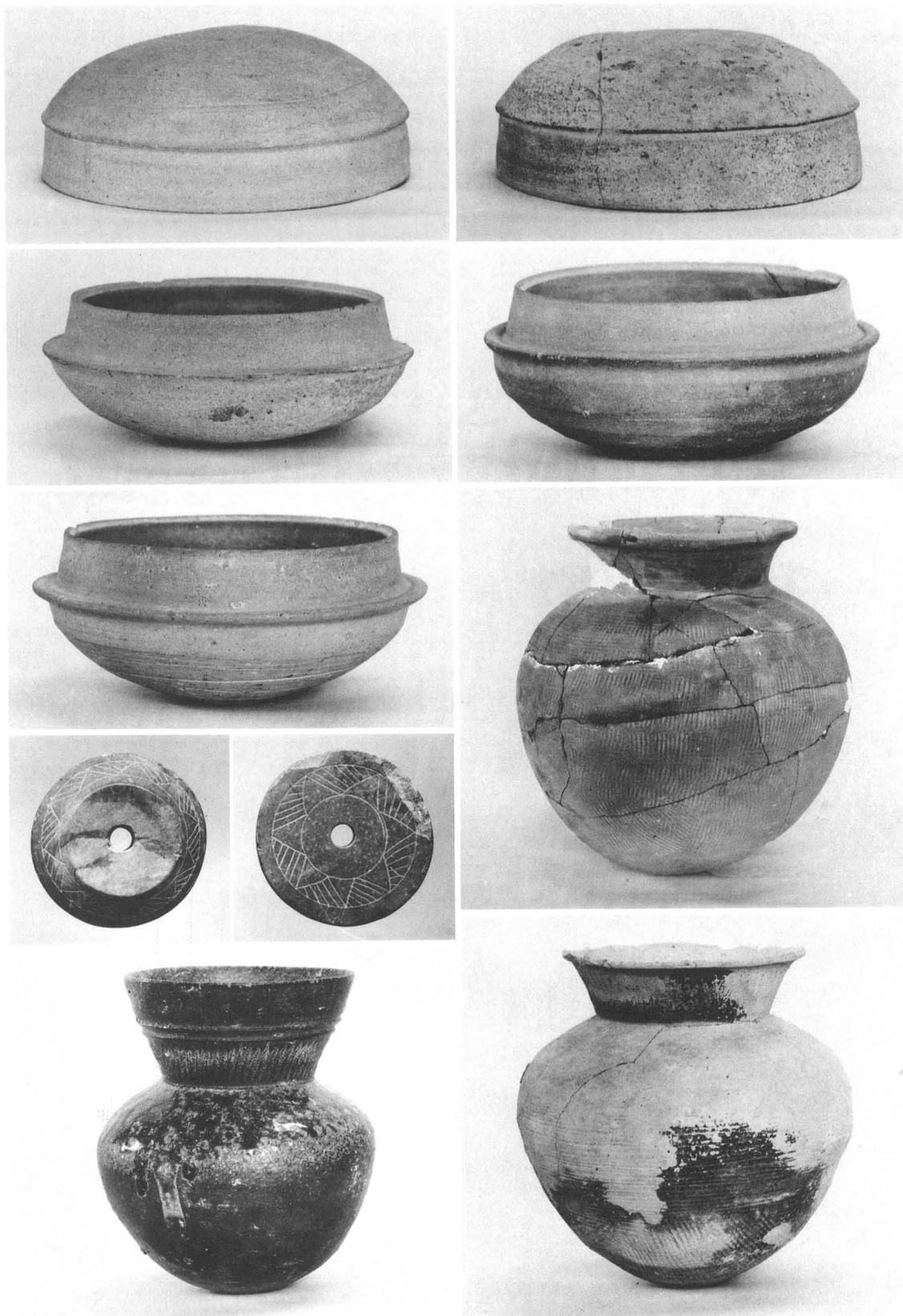
形象埴輪 (家その他)



(1) 東南方からの遠景



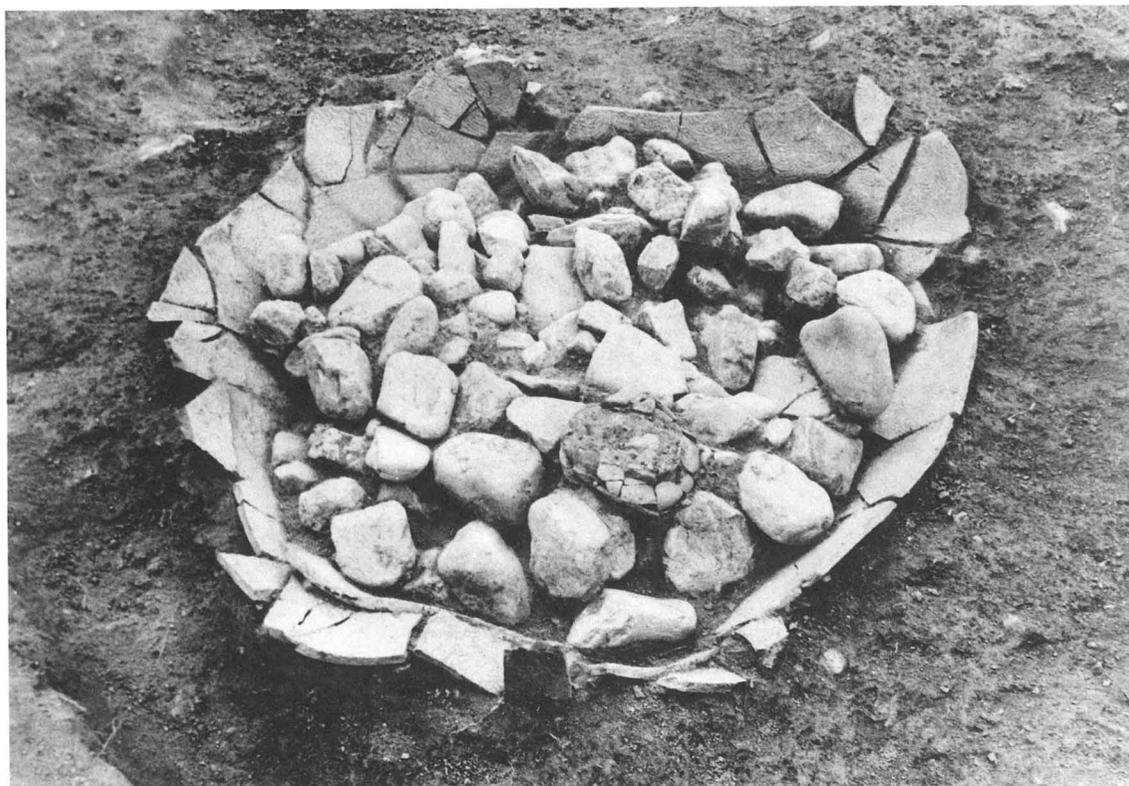
(2) 遺物出土状況



須惠器・滑石製紡錘車



(1) 西北方からの遠景



(2) 積石壺棺墓



(1) 火葬墓②遺物 須恵器



(2) 火葬墓①遺物 須恵器

高槻市文化財調査報告書 第2冊

紅茸山及岡本山東地区遺跡の調査

1966年3月発行

大阪府高槻市教育委員会

印刷

真陽社

代表者 中村友吉

京都市下京区油小路綾小路下ル